

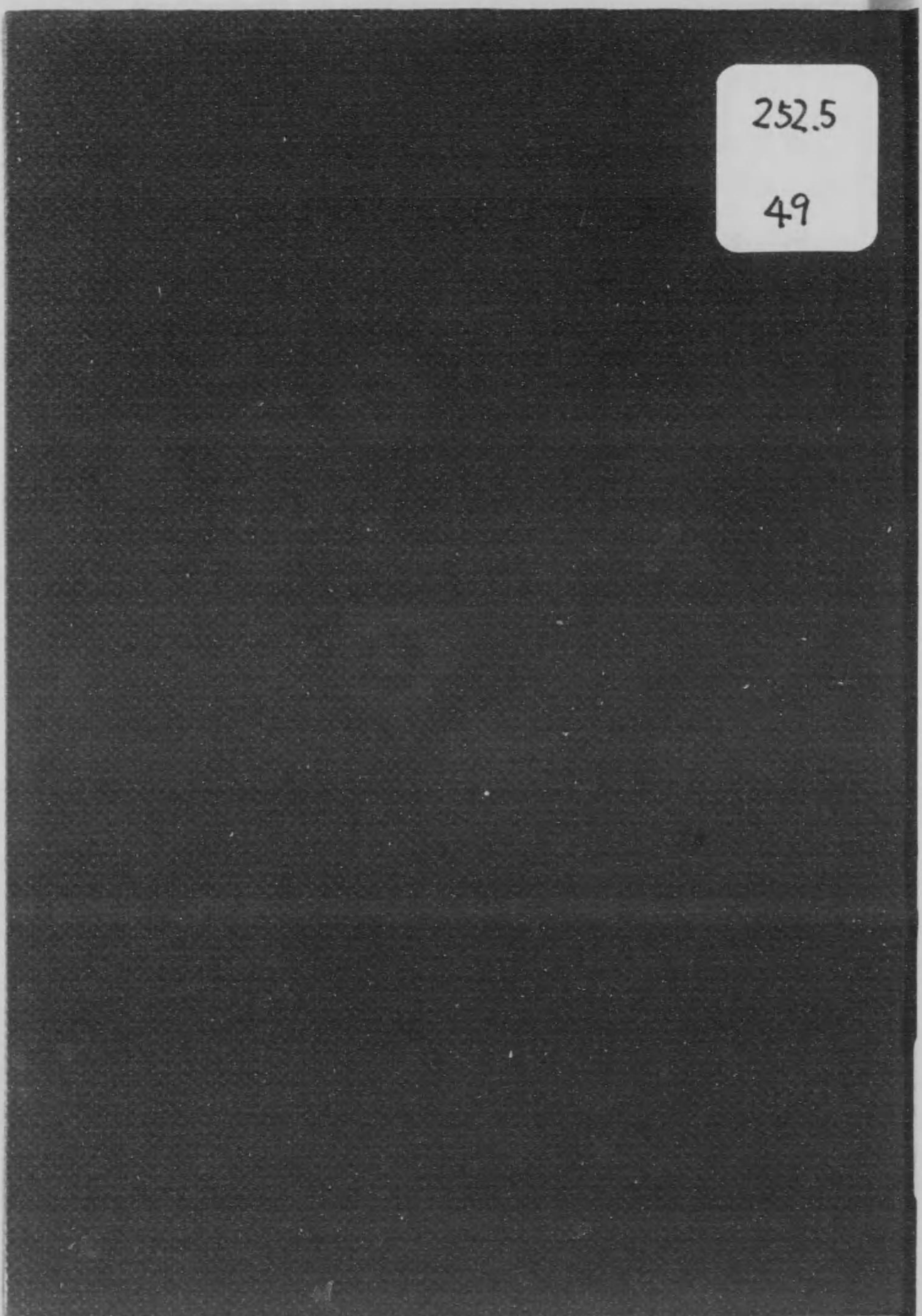
始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30.1 2 3 4 5

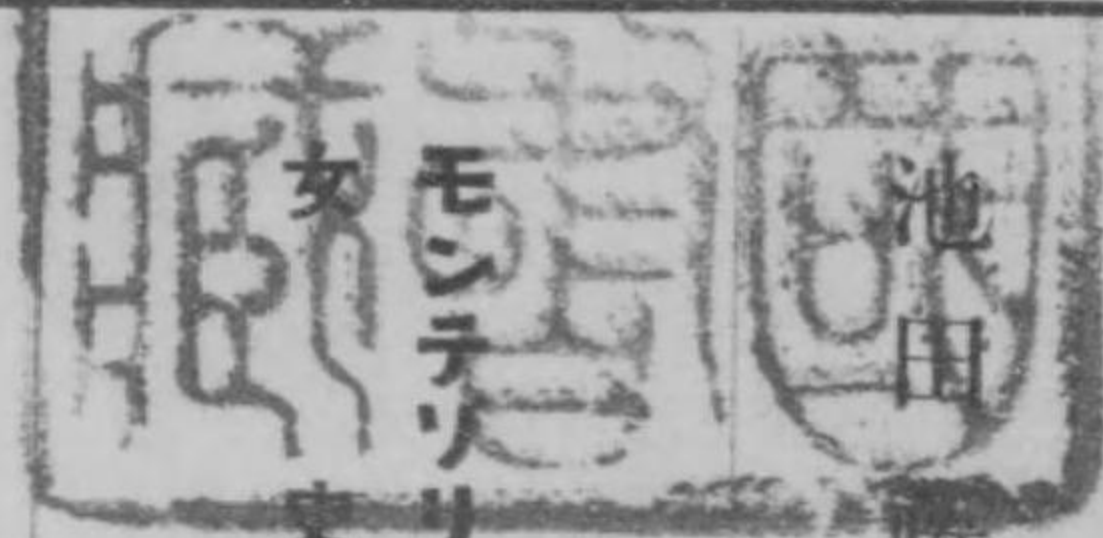
252.5

49



エト3R-31

252.5
49



池田
藤四郎
譯著

新式兒童完全教育法

一名教育界の奇蹟

東京 實業之世界社發行

大正
4. 4. 29
内交

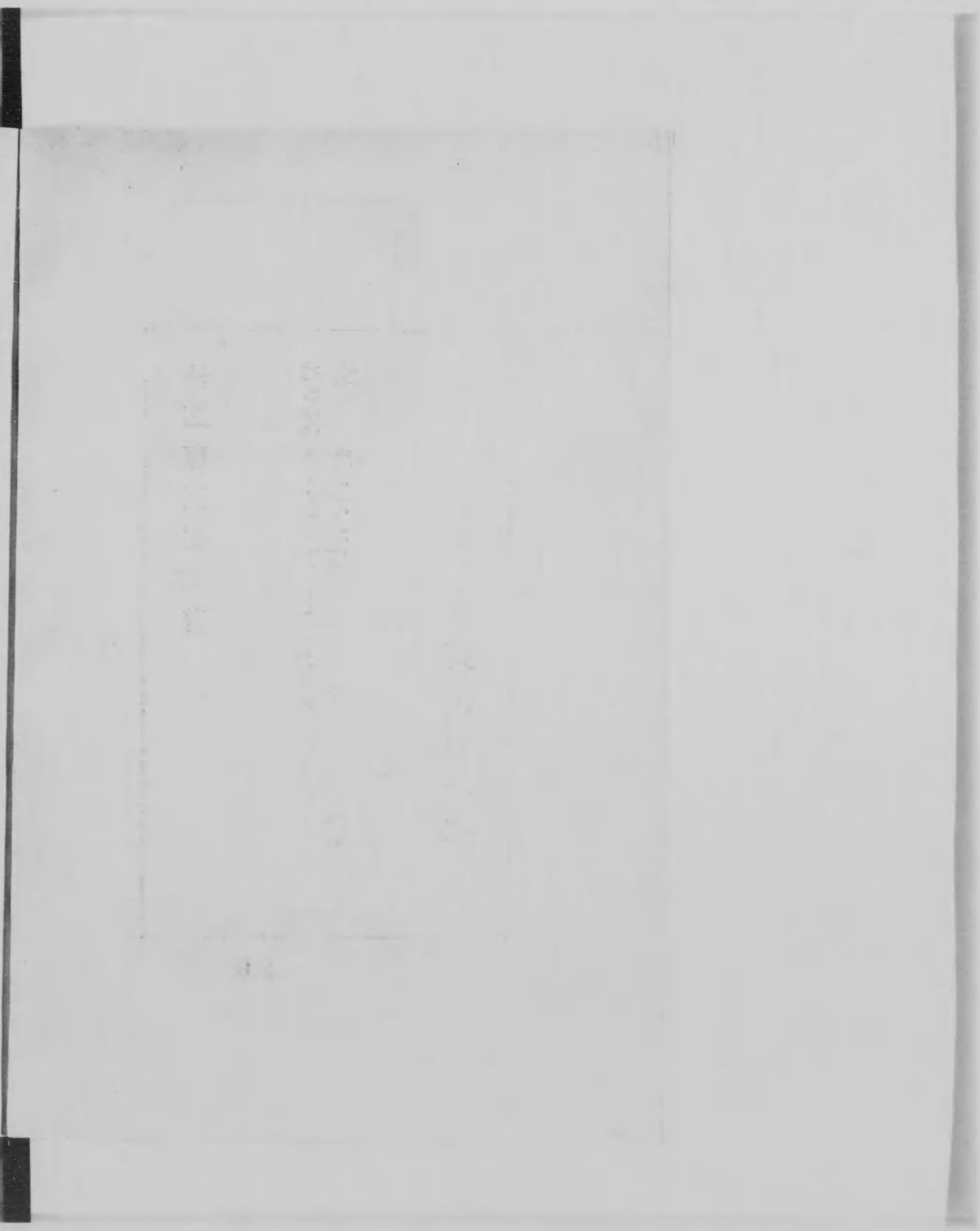
此の寫眞は、
趣ある處に妙味の存するなり。



PHOTOGRAPH BY S. MANGIARINI, ROME, ITALY, 1913

Maria Montessori
Rome 1913

史女リゾテンモアリマ



序

吾々の附近を取巻く健全の子供等には、實に思ひも寄りぬ恐ろしい力が體內に宿つて居るのです。吾々は、それに氣づかなかつた悲しさに、可憐大事の此活力を成るべく發達させまいと、大に骨を折つて居た形であつたのです。殊に、六七歳までの發達盛りに際して、一方ならず子供等の自由を妨げて居たのであります。吾々は、遅蒔ながら、自

由と云ふ言葉の意味をば、此書中説く處のものに就き、別して深く味はねばなりません。

子供は六七歳までが實に大切です。両親の膝元に絡はる時代に念を入れて世話を行届かせぬと、圓滿にフツクリと大きく發育すべき約束でありながら、眞正面に人の顔さへ見得ぬ一種の萎縮人間となる懸念があるのです。

如何なる生物でも、成長すべき性質を帯びたものには、必ず自由が之に伴ふて居るのです。鳥類には空飛ぶ自由が

あり、草木には地中に根を張る自由があるのです。是等の自由を尊重して、何等の拘束を加へざればこそ、始めて力一杯に發達するものではありませんか。

之と均しく、人類にも自然に自由が備はつて居るのです。其自由の性質をハッキリと見定めて、之を手一杯に働かせやうと云ふのが、モンテゾリ女史の着眼點であります。

左りとして、自由を尊重すると申すことは、決して氣儘氣隨を稱すの意味ではありません。吾々は、單に子供等の心

中に籠る自由の分量を發見して、之を適當に手引すれば、
親たり教師たるのつとめが、完全に果せるのであります。

この書は、此點に關するモンテゾリ女史の大發見を基礎
として、本來人間に備はる能力の全部を、完全に發達させ
やうとする種々の方法をば、通俗に説いたものでありまし
て、能力充實を旨とする理想教育を求めて居らるゝ家庭の
人々に向つて、量るべからざる利益を與ふるものと、私は
確信するのであります。願はくば、始めの二頁だけでも讀ん

で頂きたいのです。

大正四年四月十日

池田藤四郎

モンテソリ新式兒童完全教育法

目次

■ はしがき……………一

■ 山猫の如き野生兒……………三

■ 心理矯正學校に於けるモンテソリ女史の働き……………七

■ 羅馬市の貸長屋問題解決……………二二

■ 『子供の家』……………二六

■ 女史は再び十指の働きを發見す……………三三

■ ザラ／＼とスベ／＼の差を覚え込む……………三五

- 子供は自分の間違ひを正す……………二六
- 『子供の家』には悪戯兒なし……………三〇
- 二歳の小兒、曳き結に結び、釦、鉸具を易々と嵌める……………三七
- 發音の稽古で綴字を覺える……………三九
- 手觸りに依り圓も角も知れる……………四一
- モンテソリ女史の教を受けた子供は目隠しの儘五穀の區別をする……………四七
- 『無言遊び』……………五一
- 母親は其の子供に手習を教へてくれと女史に迫る……………五五
- 切抜き文字で言葉を組合せる……………六三

- 子供等は少しも習はずに文字を書き出す……………六六
- 全校悉く手習熱に罹る……………六九
- 四歳の子供は六週間で文字が書ける……………七二
- 遊びに事寄せて讀方を學ぶ……………七五
- 子供等は自分で着衣も入浴もする……………七九
- 四五歳の子供は立派に御給仕もし皿なども洗ふ……………八二
- 指尖の働き……………八六
- 木製のシリンドル(分銅)……………八八
- 廣い階段に長い階段……………九〇
- 次郎さんの實例……………九三

- 指尖で物を見る稽古……………九五
- 反物の地質を目隠しで言ひ當てる……………九七
- 重い軽いの區別……………九九
- 手習の手ほどき……………一〇一
- 鏡紙製の文字……………一〇五
- 智慧の突發……………一〇六
- 赤文字青文字の文句……………一〇八
- いよ／＼讀めて來た……………一一三
- 印刷した文字……………一一五
- 子供に空想は禁物……………一二八

- 算術の手解き……………一二二
- 三歳の子供良く色の區別を呑込む……………一二五
- 子供の嗜好を尊重せよ……………一二九

モンテソリ 女史 新式兒童完全教育法目次終



モントゼリ
新式兒童完全教育法
一名教育界の奇蹟

池田藤四郎譯著

◎はしがき

所謂幼稚園時代、即ち六歳迄の子供を適當に教育すれば低能兒と雖も普通の人間程には智識が發達する。すると、在來の教育法に依る普通兒童は、教育の如何に依り、低能兒と雖も、猶且つ容易に達し得る程度に過ぎぬことに

はしがき

なつて、その立場が問題になる。そこで、モンテゾリの新教育法は、普通人に對する教育の標準を高むる爲めに、取敢ず企てられた、最初の手續である。惟ふに在來の教育法は折角發達しようとする人類の肝腎な機能を働かせまいとして居る。例へば、子供といふものは觸覺が、吾々の想像も及ばぬ程に鋭敏で、早く云へば、指先が眼の代用をする程である。此の時代を狙つて、此の尊い人間の力を、發達させぬといふのは愚である。殊に、手先指先の鋭敏さは捨て、置けば全く鈍くなり、磨けば磨く程發達する。是が好個の適例は、彼の按摩を見ても分る。子供の時代に不自由の身となつた盲人は、必要上驚く程、感が發達して居る。處が中年者の盲人はブマだらけである。盲人の感の強い事は、吾々も朝夕見聞きして居るが、是は特に盲人に限つて授けられ

たものでは無く、何人にも具はつて居るものである。是を肝腎な子供の時代に、巧みに賤け充分に發達させれば、夫こそ鬼に金棒である。惜しい哉、在來の教育法は、餘りに機械的、不自然的であつた爲め、此の重大なる點を輕んじて居た。隨て白痴は一生白痴なりで世を終り、普通人は本性と感能とを思ふ存分發達させずに、謂ゆる生半可で満足する譯であつた。然るに此の新教育法は人間の能力を精一杯發揮して何等の苦痛も面倒もなく、一人前の人間を半人前もなく、タツブリ一人前に仕立てやうと云ふのである。

◎山猫の如き野生兒

千七百九十八年、今から數へて百十八年前、佛蘭西の或る森林で、一見漸

く十一二恰好の野放しの子供の捕へられたことがあつた。打見た處、刺に刺され、野獸の牙に掛つて、總身傷だらけで、殊に著しきは咽喉の大傷であつた。察するに、彼は初め何者にか殺されかゝつて森の中へ棄てられたものであらう。

後都の巴里へ連れ來たつて、兎に角、其當時盲啞學校附であつた醫者のイタール博士に彼を委せる事にした。此ドクトルは非常な辛抱と智慧とを働かせて、山猫にも等しき生活を送つて來た此野生の小兒の教育に全力を注ぐ事になつたが、さてドウモ眼に見える程の効力としては現はれなかつた。蓋し彼は全くの白痴であつて、耳こそ聞えたが、口は遂に利き得なかつた。其後千八百二十八年に彼は年三十一歳で歿したが、其當時、同人の智能の發達程度

は、多數の野獸にも劣つて居た。

それにしても彼を教育せんとした博士の盡力は全く無駄には終らなかつた。イタール博士は此の經驗に依つて大に得た所があり、低能兒取扱の最良法に就て、多くの有益なる結論に到達することが出來た。そして是等の研究の結果を其弟子セゲンに引継ぎ、同時に、セゲン其人に此の問題に對する熱烈不撓の興味を授けて、大に聲援する處があつた。此セゲンと云ふ男は千八百十二年の生れであつたが、疾くも低能兒治療の著名な専門家として一家を爲し、次いで千八百三十九年彼は佛國に初めて白痴學校を設けた。其後千八百五十年の頃、彼はナポレオン三世の野心に對し、尠ならず不快の念を懷き、其極、遂に米國へ移住することゝなつた。暫くはオハヨー州あたりを彷徨

復つて居たが、應て紐育市に引移り、其地に千八百六十二年頃から千八百八十年、即ちその歿するまで留まつて居た。彼は米國へ來ても重立つた醫師仲間から非常に尊敬され、現に低能兒の教育問題に就ては、立派なオーソリテーターとして重きを爲して居た。如何なる低能兒と雖も、自分の教育法にかけずて全く手答へのなかつたのは千人中に一人も無い、自分の手に掛けた者は百人が百人共多少以前よりも幸福となり、丈夫になつたと、彼は其當時言明して居た。「少なくとも三割以上は普通人の三分の一程度に働き得るやうになり、四割以上は普通人の三分の二程度の働きが出来、二割五分までは普通人の標準に一步一步近づいて來た。」と、斯ういふ事を同人は言つて居た。

◎心理矯正學校に於けるモンテソリ女史の働き

是より先、千八百四十六年、セゲンは巴里で白痴教育に關する一書を公にした。そして其一本が或日偶然にも此記事の主人公たる、伊太利の教育家マリア、モンテソリ女史の手に入つたのである。女史は婦人で羅馬大學から醫學士の學位を受けた嚆矢であつた。そして精神療法部の助手を勤めて居た御蔭に、低能兒の教育には疾くから多少の趣味を持つて居たのである。隨つて謂ゆる「教育療法」なるものに就て自家獨得の方法を説明したセゲンの議論は、圖らずも女史の思想と全く合致し、既に其胸中に萌して居た考案に一層の確信を與ふることになつた。且又セゲンの著書の手引に由つて、女史はイ

タールの實驗に就て多くの智識を得、千八百九十八年、テュリンの教育大會に於て、極めて手際よく其意見を發表し、明白に自己の立場を説明した。其結果、文部大臣バツチエリ氏は女史に囑するに、低能児教育に興味を有する教師等に對し、一場の講演を羅馬市に開かれんことを以てした。此講演の結果、應て心理矯正學校の設立となり、羅馬市中の一切の救護院に収容せる低能児を初めとして、各家庭の依頼に由る不幸の兒童等は、何れも皆此學校に入ることになつた。

モンテソリ女史は、實に二ヶ年餘、此學校の校長を勤めたのであつた。

女史が此學校に於て擧げた成績は、殆ど奇蹟にも比すべき程のもので、公立救護院から同校へ來た低能児は、女史の教育法の御蔭で、何れも同じ年頃

の普通の兒童が、公立學校で通過すべき筈の試験を易々とバツスし得る迄に、読み書きを覚え込んだ。如何にして此驚嘆すべき成功の域に達し得たものか、女史は其秘訣を至極單純であると云つて居る。

「救護院から來た低能の兒童等は、公立學校で實行して居る方法とは、全く別の道を歩んだのだ。是が謂ゆる秘訣である。彼等は其心理的發達に就て大に補助誘導されたのである。然るに普通の兒童は、小學校に在て、全く此方面の發達を阻害され、壓抑されて居る。當然發達すべき筈の脳味噌は無理に抑へつけられて居る。即ち教育法が誤つて居る結果として、知らず識らず邪魔を受けて居た形であつた。其中に私も多少思案のついた事があつた。

畢竟、低能児を發達せしめ得た斯くも驚くべき特別教育法をば、發育健全

の兒童の啓發に適用して、同様の好結果あるものとせば、前に記した謂ゆる奇蹟なるものも消え去つて、低能兒と普通兒童との間に於ける當然の區別は、再び現はれて來る。即ち今や新教育法のお蔭を以て、低能兒と雖も普通の兒童ほどに其能力は發達して來たが、更に進んで普通の兒童を是と同一の方法で啓發誘導すれば、到底低能兒の追付けぬ程度に進んでしまふは必定である。皆さんが私の手許に收容する低能兒の、段々進歩する様子を見てお褒め下さつてゐる間に、私は無病息災の學童が、私の手許の不幸な子供等と、能力の比較に於て將に追付かれんとする不態を見て、實に心外に存じて居るのである。發育に一點の中分ない子供等が、白痴に較べて大した異りのない様なことでは、現在の教育法に驚くべき缺陷のあることが自ら明白になる。果して如何

なる理由により、斯くも嘆はしき状態に甘んじて居るのであらうか、私は其理由に就て種々と思案に耽つて居たのである。』

千九百年（明治三十三年）、モンテソリ女史は、心理矯正學校を辭して哲學の研究を目的に、再び羅馬大學に入り、今度の特に實驗心理學を専門とした。其頃、實驗心理學と云へば、伊太利の諸大學校に於ても、未だ全く新しい學問であつた。女史は此好機を利用して、附近の有ゆる小學校を手の届く限り參觀し、いろ／＼と教育制度に關する研究を試み、且つ當時、普通兒童の教育上に、普ねく用ひられて居た方法等を、潜心攻究する處があつた。

爾後約七年間、引續いて實驗教育學の各方面に亘り、不撓不屈の研究を遂げた後、曠て女史の理論を實行すべき機會が、殆んど豫期せざる理想的の方

法で湧いて来た。千九百六年女史は圖らずもエドワード、タラーモなる著名の技師と懇親を結ぶことになつたが、其時、技師のタラーモは女史に對して將に羅馬市内に設立せんとする若干の幼稚園をば、全然女史の手に一任したいと申出た。モンテゾリ女史に取つて、是より好い機會が再とあるであらうか。

◎羅馬市の貸長屋問題解決

幼稚園と云つた所で、是等は何れも普通の幼稚園では無く、要するに、社會改良事業の一部分として新に設けられたものである。是より前、千八百八十年代の終りに際し、羅馬市中を通じ非常な建築流行の年があつた。人々

は何れも先を争ふて家を新築し、貸長屋の思惑に狂奔する始末で、此熱狂時代に當つて、市の一部分は全然貸長屋町と姿を變へて了つた。然るに未だ是等の長屋が悉く新築落成せざるに先だつて、反動時代は早くも不景氣を齎らして来た。折角出来上つて見ても肝腎の當てにした借家人は一人も出て来ず、家は何れもガラ空きの状態で、碌に家賃も拂へぬ借家人ばかり澤山だつた。中にも狡猾な山師などは、七間八間の大きな部屋を有する貸長屋を、一棟、月十六圓位に借り入れ、それを又一室々に區切り、廊下までも合せて月三十二圓は必ず自分の手に這入る様に轉賃をした奴もある。無論自分は別に家賃を拂ふに及ばず、其上借家人などに高利の小金を貸付けて、餘計な暴利を貪りもしたらう。コンナ風で、此貸長屋の數多く設けられた地方は、一

般に大雜間を極めた不潔非衛生の貧民窟となり果て、了つた。不充分的な光線と腐敗した空氣の裡に育つた長屋町の子供等は、勢ひあらゆる犯罪と墮落とに接近して成長せざるを得なかつた。月日の經つに隨ひ是等の弊害は益々蔓つて來て、終に如何とも拾收すべからざる状態に陥り、已を得ず其救済を目的とする協會の設立を見るに至つた。羅馬不動産協會は即ち夫である。設立後間もなく、協會は長屋町の一廓に存在する貸長屋五十八棟（千六百軒の割長屋）を手に入れた。そして取り敢へず改良の第一着手として、此一廓を貧民の借家人の住居に適する様、衛生上申分なき長屋町と變ずる事に手筈を定めた。

此目的を達せんが爲め、總て中央に位する建物は取り壊してしまつた。今

までは真中を建物で塞がれたので、空氣も光線も充分に通じなかつたが、いよいよ真中の邪魔ものを取り除いて見ると、附近の長屋は何れも室内が非常に明るくなり、空氣の流通も思ひの儘になつた。そして建物を取り壊して跡へは、丁度頃合の内庭が出來、誠に衛生上一舉兩得の譯合であつた。

次いで協會は各長屋の割當て方を變へ、一軒に數家族の同居は許さぬことにし、何處までも一戸一家族制と云ふことにして、同居の混雜を防いだ。同じく雜間を防ぐ爲めに、新たに階段を増設した。斯の如き筆法で着々と改善整理を行つた結果、曾ては至つて不適當な住宅向であつたものを、面目一新頗る好箇最適の住宅向に變へてしまつた。更に一步進んでは、清潔及び善良の風紀を維持尊敬せしむるため種々なる懸賞方法の設けもあり、就中、一町

内中の最も始末よき住宅振りに對しては、毎年一回賞與を出す規定であつた。

○『子供の家』

左れど、惟ふに清潔と善良の行儀作法とを一層奨励したものは、恐らく『子供の家』と稱する児童收容所を設けた御蔭であつたらう。

收容所の規模と感化力は、各町内に貼出してある左の諸規則を見れば、概その見當はつく筈である。

『子供の家』に於ては、夫々児童の年齢に應じ學課と實習に依り、児童の教育、健康状態、及び體育、徳育の啓發に特別の注意を拂ふ可し。町内に住する三歳以上七歳までの児童は、總て『子供の家』に入學する事を得

『子供の家』に入學する児童の両親は、金銭上何等の負擔を要せず。但し左の諸義務を引受くるものとす。

(イ) 毎日豫定時間内に其子女を登校せしむべし。但し子女の身體服裝は清潔なるを要し、且適當の涎掛を着用せしむべし。

(ロ) 『子供の家』の校長及び教員に對しては至大の尊敬を以て是に接し、且つ子女の教育を鼓舞奨励するに就ては、一切校長と協力す可し。少なくとも毎週一回子女の母親は校長に面會して家庭内に於ける其子女の勵勢を報じ、之に對して校長より子女の誘導に關する諸注意を受くる事を得。

左の児童は退校を命せらるべし。

- (イ) 身體及び服装共不潔の儘登校する者。
- (ロ) 校則を守らざる者。
- (ハ) 兒童の兩親が『子供の家』の教職員に對して、尊敬を怠るか、若くは其不行狀の爲めに『子供の家』の目的及び教育事業を没却するの虞ある者。

最も始末方のよき住居振りに對する年一回の賞與は、兩親が其子女の教育に關し、『子供の家』の校長と協力せし事蹟を參酌して決定すべし。

右の規則中に籠れる情ある専制主義は、何處でも歡迎されると云ふ譯には行かない。左りながら此『子供の家』が、當の目指す方面の人々に取り非常に有用で、且つ適切のものなることは疑ふ餘地がない、即ち一の學校である

と共に、一面子供預り所の用を足して居るからである。子供預り所とは、母親が工女として稼ぎに出た場合、若くは其他の場合に、其子供を預る場所の謂で、之が爲めに、一家の經濟はどれほど樂になるか分らぬ。

同時に、一家内の清潔と秩序を保持する上に、最も困難とせらるゝ分子を除き去ることになる。由來、子供のある家は多く穢くなる。子供が外へ遊びに出ると、家内はそれ丈綺麗になる。故に晝日中、斯ういふ理想的の學校があれば、それだけ住宅の不潔になる機會が少くない譯である。又『子供の家』の各先生は、其所屬の町内に住むべき嚴重な規則があつて、彼等は絶えず兒童の兩親と接觸して居る。兩親は其子女の様子を見届けるために、何時でも學校に出入自由である。モンテゾリ女史の言葉を藉りて云へば、『學校は家庭

内に設けてあるも同然で、謂はゞ長屋中の共有財産といふ形になつてしまふ。彼等にとつて共有財産といふ感じは頗る珍らしく、何となく心持のいゝ、而かも頗る教訓的のものである。』

羅馬不動産協會の會長たるエドワード、タラーモは、其職權を以て、同協會の手に設立すべき全部の學校をモンテゾリ女史に任せ、且つ女史の最良と信ずる方法に由つて、組織經營すべき一切の權限を附與した。

爰に於て、女史は千九百七年(明治四十年)一月六日、羅馬市に第一の『子供の家』を開き、モンテゾリ教育法をよく呑込んで居る女教師に是を一任した。同年四月七日には、早くも第二の『子供の家』が設けられ、千九百八年十月十八日、ミラン市の人道協會もまた、同市の労働者住居區域に『子供の

家』を一箇所設けた。又同協會に屬する労働部は、モンテゾリ主義の學校で用ふる教育用器具を一切製造する事になつた。羅馬市駐在の英國大使の別荘には、特に貴族の子女を教育する小さな同主義の學校が設けられた。此外、中流社會の子女を教育する爲め、羅馬に二ヶ所同一の學校が開かれた。而して、是等は何れも悉くモンテゾリ女史の直接監督の下にあるものである。

モンテゾリ女史の擧げた成績の中、その最も顯著なるものは、頑是なき子供等に對し、其諸機能に少しの勞苦をも與へずして、第一に書く事、次に讀む事を教へ込むことである。女史の新教育法は、在來の教育法と異なり、先づ書く事を仕込み次いで讀み方を教へる。讀んでから書くといふのが從來一般の順序であつたが、新教育法は此順序を逆にしたものである。然しそれ迎

も、其他の多數の結果と同じく、最初から之を豫期して居たものではない。就學兒童等は、唯だ何氣なく、相當に成人したから自然書きもし、読みもする様になつたのだと覺つて居たらしい。此點を一層精しく説明するには、少しくモンテゾリ教育法の理論と實際とに立入らなければならぬ。

◎女史は再び十指の働きを發見す

モンテゾリ教育法の根本には、謂ゆる十指の再發見と云ふものが潜んで居る。セゲンの暗示に依り、女史は觸覺、即ち五官の基礎たる觸覺が、視覺の介錯を爲し、延いて適確なる知覺の手引をするものであるといふ事に氣が着いた。同時に觸覺が諸機能中最も發達の速なるものであること、且つ是を捨

て置く時は、極めて迅速に鈍るものであること等に着目した。女史は兒童の指先が殆んど信じ得られざる程鋭敏のものであると共に、相當に仕込むことを怠らんか、六歳以後に及べば漸次其感覺が鈍くなることをも發見した。そこで女史は其新教育法の第一着手として、兒童に指先を通じて事物を見る事を奨め、斯くして獨りでに物を覺え込むやうに工風した。單に是れだけでも大層結構なことであるのに、尙此外に大なる利益があつた。即ち普通の教育法の缺陷たる目に苦勞を與へて是を疲らし、延いて腦に重税を課することを、及ぶ限り避け得たことであつた。觸覺が段々發達すると、下等神經中樞に反射作用が起る。元來下等神經中樞と腦とは、尙に交渉の薄いものである。随つて觸覺は、腦其物に對して甚だしい影響ある反射作用を起さぬものであ

女史は再び十指の働きを發見す

る。

モンテソリ女史が、最も一般に行はれて居る近來の幼稚園制度に反對して居る一の理由は、幼稚園の教育法が、腦に最も密接の關係ある機關、即ち目に有害の努力を強ひて居るからである。視力を疲らせることは、腦を疲労させる所以である。されば幼稚園時代に腦を甚だしく苦勞させることは、頗る面白くない影響を來たすものである。

そこで、モンテソリ主義の學校に兒童が入ると、先づ第一に觸覺の教育に着手する。最初は丁寧に石鹼をつけて冷水で手を洗ふお稽古をする。冷水が濟んだら、次に温湯を用ひる。更に親指と食指との二本を、最初は冷水に次は湯に突込ませる。これで湯と水の差をハッキリと感得せしめる。湯水の

區別に次で、「ザラ〜」と「スベ〜」の差を覚えさせる。是は實際の學科である。殊に「子供の家」に於て用ふる唯一の教へ方の説明であるから、次に精しく述べることにする。

◎ザラ〜とスベ〜の差を覚え込む

先づ兒童の目前に二枚のカードを並べる。兒童は机を前にして、綺麗な廣とした椅子に、樂々と腰を掛けて居る。並べたカードの一枚は縐子紙のやうにツル〜として居り、他の一枚はザラ〜としたボール紙製の鑢紙である。先生は臙て子供の手を取つて、スベ〜のカードに其親指と食指とを觸れしめる。それも充分に注意して、左から右へと撫でさせる。之をよく氣を着

けてやらぬと後日故障が起る。畢竟左から右へ撫でさせるのは、物覺えを好く發達させる爲めである。子供の可愛い指尖は、スベ〜としたカードの撫で心地を、頗ぶる快く味つて居る。先生が手を放してから後も、頻りに自分で撫でながら、先生の顔を見てニッコリする。此機を逸せず先生は、緩くり且つハッキリ、「スベ〜」と發音する。此際兒童に對して甘い言葉を附加へることは教師として正に越權の處置である。決して「好い兒」だとか、「好し好し」など、いふやうな言葉を附加へてはならぬ。餘計な言葉を掛けると、必ず子供の頭が混雜して來る。頭の混雜は腦に苦勞を與へると云ふ意味である。腦に苦勞を與へることは實に大禁物である。

子供が引續いてスベ〜のカードを撫でて居る間は、先生も「スベ〜」

と云ふ語を繰返し繰返し聞かせてゐる。其うちに子供は其好奇心に驅られて、スベ〜のカードから指尖を放し、更に今一枚のカードを撫で、見たいと云ふ氣を起す。そして自ら進んで、親指と食指とを靜かに鍔紙で作つたカードにつけて見る。此時、先生は「ザラ〜」と云ふ語を發する。子供は如何にも鍔紙の肌觸りが氣に入らぬ。自然その指を引込ませる。其うち又怖々撫でて見る氣になる。教師は再び「ザラ〜」と言つて聞かせる。これが一通り済むと、今度は一旦カードを取り上げて再び子供の前に並べて置き、先生の方から、「私にスベ〜のを下さい」子供に問ふ。之を聞くと子供は直ちに手觸りの好いカードを思ひ出し、それを先生に渡す。次に「私にザラザラなのを下さい」と試す、是も無事に及第する。是等の所作をば、よく子供

ザラ〜とスベ〜の差を覺え込む

に見る例のマセ〜とした風で行ると、先生は笑ひながら『有り難う』と答へる。再びカードは机の上に置かれ、先生はスベ〜したカードを指して子供に向ひ『是れはナニ?』と聞く。子供は此處ぞと言はん許りに鼻高々と『スベスベ』と答へる。『それぢや此方は?』と聞けば『ザラ〜』と挨拶する。

◎子供は自分の間違を正す

と云つて、子供の答は何時でも正しいと思つてはならぬ。『スベ〜』と『ザラ〜』位の簡単なものならよいが、モウ少し學科が進んで、混雜つた事になると、兎角間違ひが起り勝ちである。是に對して先生の守るべき點は、いよく間違つて來て子供の目に甲乙の區別が判然とせず、混雜して居ると

思つた時、それを一々傍から正すことをしてはならぬ。子供自らをして、静かに思案せしめ、其間先生は他の仕事に赴く。特に子供の求めがない以上、其儘翌日まで捨て置く。序ながら、斯の如き實物教授は、常に二個の物體を用ゐて行ふものであることを一言して置きたい。決して二個以上のものを同時に見せてはならぬ。

子供の間違を先生が正さずに置くといふことに就ては、モンテソリ女史の説明を左に掲げる。

『一體何の要あつて子供を正すのか。若し物體を見て其名稱を思出せなかつた場合、再び記憶を呼び起させる唯一の方法は、直ちに官能刺戟の作用と聯想語を繰返さしめるに限る。前の稽古をモウ一度繰返さしむればよい』

子供は自分の間違を正す

のである。子供が間違をしたといふことは、先生の方で斯うあれかしと希望した心理的聯想が、其瞬時子供の方に起らなかつたからである。随て時を更ふることが最良の策である。』

◎『子供の家』には悪戯兒なし

モンテゾリ女史の意見に依れば、總ての價値ある教育は、須く自發的教育たるべしといふことである。是は他動的でなく、自動的たるべしといふ意外ならぬ。そこで同主義の教員を仕立てるに就ても、一番面倒な事は、兎もすると、彼等は兒童が答案に闕へて思案に暮れる場合、傍からそれを手傳ふてやる一件である。是は甚だ宜しくない事で、吳々も之をさせぬやうに教員

を仕立てるのが専一である。

子供が答に窮すると『可愛想にネ』とか『よし〜』と云つた調子で手傳ひたがるものだ。斯うすると子供の手から、困難に打克つ喜びと獨立心とを、併せて奪去る事になる。

固より此の無干渉主義は、徳育、智育の兩方面に等しく適用して可なるものである。自然此關係上『子供の家』では賞罰なるものを一切行はない。『賞罰よりも自由』といふ理想を目的として是に達した譯である。普通の學校に見る機械的の規則攻めは、モンテゾリ新教育法には薬にしたくも無い。女史は、例の近頃の教育家などが矢鱈に鼻を高くして居る、尺度すくめで拵へた教室用の學理的椅子机などを見ると、直ぐ皮肉に出たがる位である。女史の

子供の家には悪戯兒なし

意見に依ると、就學兒童の脊骨彎曲を防がうとして、机と椅子の關係を學理的に調節しようなどは不必要の事である。故に女史の考案は、持運びの容易な、坐り心地の好い小さな椅子を用ひ、決して少しでも筋肉の硬ばるやうな、不動の姿勢を長く続けさせぬ流義である。兒童は宜しく一定の範圍内に自由でなければならぬ。蓋し此範圍は學臭的言傳へに據つて定められたものでなく、一般社會上の作法から割り出されたものたるべきは無論である。言葉をかへて言へば、如何に吾身の自由なりとて、他人を害し、若くば人に不快の念を與へてはならぬ。要するに兒童に對しては善惡の差別を良く教へなければならぬ。普通の躰け方を見ると、引込思案と善事とを同一の意味に取り、活潑に動く事を惡事と混同して居るやうである。女史の心配して居るのは此

邊の關係に就ていある。翻てモンテゾリ式に依る『子供の家』に就て、就學兒童間の紀律如何を見るに、事實何等の面倒はない模様である。此點に關して女史は實に左の如く言明して居る。

『どうかすると、他の邪魔をして却々言ふ事を聞かぬ子供が無いでも無い。斯ういふ場合には、差向き醫者に診察させるが、然し別に故障もなく普通の發育状態である場合が多い。然らば如何するかと云ふに、今度は教室の一隅に小さな卓子を特に運んで、此惡戯兒を其處へ坐らせる。謂はゞ自分一同のものと同様の向き合せる形になる。當人に對しては、其欲するものを與へてやる。殊更單獨に區別されて見ると、多くの場合、大抵の子供はおとなしくなる。唯一人片隅に控へて居る其直ぐ前には自分の友達が優勢

こちらを向いて居る。自然他人の行状を見ては、自分の行状を正すやうになる。是は何ものにも勝る最良の實物教訓であらう。加之、獨り者にされた子供は恰も病人でもあるやうに特別の世話を受ける。先づ私など其教室へ行くと、第一に隅の子供の傍に行つて、赤ン坊のやうにいたはつてやる。さうして今度は級全體の方を向いて、立派に成人した一人並の人間を扱ふ手心で一同に接してやる。この場合、其心理に如何なる影響を與へたか、私にも分らぬが、兎に角其子供が改心して見違へるやうになるのは確實である。』

併し、是等の方法も、腕に覺えのない不注意の教員に任せると、劍呑至極の結果を來たさぬとも限らぬが、幸ひにモンテゾリ女史は子供の教育に良績を擧げ得た許りでなく、教員を仕立てる事も巧い。無論、彼等にモンテゾリ教育法の原理を呑込ませるのは、當初頗る困難であつた。彼等はこんな事を言つて反對する。『何です？子供の間違は正さず、賞罰も一切無いのですつて？唯だ個人の感化だけですか。これでは、手もなく無政府の状態です。あまやかし切つた赤ン坊達は、各自勝手な真似をして、先生の命令はイツカナ聴かぬといふ手におへぬ事になります。』併し、モンテゾリ女史は他くまで其主張を變更せぬ。事實また、六ヶ年餘の實驗に徴するも、『子供の家』に於ては未だ無政府の状態を來たしたこともなければ、秩序の破壊されたこともない。畢竟、是等の教員連中は、治者の平和神経が被治者の平和神経を誘ふといふ一大教訓を學んだのである。固より彼等は何れも心の廣い、同情心に富んだ

實際的常識の發達した教員達のみで、『辛抱』と『無性極まる黙従』との間に横はる肝腎の相違を充分に呑込んで居る。彼等は又賞罰に對する能の取り方を誤らず、兒童を少しも叱責することなく、彼等に善惡の差別を得心せしむべき途を心得て居る。随つて兒童等は唯だ先生の一舉手一投足に依つて、右にも左にも自由になる程、嫉けが行届いて居る。其狀恰も樂長の指揮鞭に依つて意の儘に動かさるゝ樂隊の如きものである。されば或る人の女史に質しけらく、如何なればこそ、斯くも靜かにおとなしく兒童等を教へて行けるものかと。女史の答へは至極無雜作である。曰く「それは何でもないので、皆んな各自に好きな事をして居るからおとなしいのです。」

◎三歳の小兒、曳き結に結び、鉤、鉸具を易々と

嵌める

話は再び前に戻り、例の『ザラ〜』と『スベ〜』の差を漸く覺え込んだ子供に移る。さて新に『ザラ〜』と『スベ〜』を覺え込んだ例の子供は、自慢の鼻も高々と、折柄隣の卓子で、刺繡臺の兩側にブラ下つてゐる二本の布片紐を、一生懸命リボン結びに結んで居る少年に對つて、自分の覺え込んだものを見せやうと焦つて居る。教員に聞けば、此子は幾日となく、此リボン結びを倦まずに稽古して居るのださうな。年は漸く三歳に過ぎないといふのに、普通の七歳前後の子供ですら容易に結び得ぬリボン結びを樂々と

結んで居る。そして一方の子供がカードを両手に持ち、是を撫でながらザラザラ又はスベ〜と云つて見せると、此の子供は、無頓着に是を見て、チヨツと頷くと直ぐ其儘、ふたゝび自分の好きなリボン結びに餘念が無い。

小さな指尖を器用に働かせる稽古をして居つたのは、此兒ばかりではなかつた。向ふを見ると、いろ〜の年齢好の子供等が、革の紐、布の紐などの、何本となくブラ下つて居る刺繡臺を取巻いて、それ〜紐の結び方の稽古をして居る。革の紐には釦と釦孔とが夫々別々について居る。要は指尖を用ゐて、釦の嵌め方、ビジョウウの締め方を稽古しながら、觸覺を發達せしむるにあるのだ。此玩具は、望み手が常に多く、間斷なしに後がつかへて居る。婦人のコルセットの締め紐の着いたもの、上衣を締める絹紐つきのものなども

下つて居る。大小の鳩目とフックの着いたもの、羅紗に着いた釦、リンネルに着いた貝釦等、ありとあらゆる釦類、フック類、鉸貝類が、布地や革紐に着いた儘、刺繡臺にブラ下つて居て、子供等の扱ふ儘に任せてある。そして男の兒も、女の兒も、共に是を楽しんで居る。子供等は何れも皆家に歸つてからも、實物に就て是を應用するので、此頃は宅の子も、最早一人で着物を着ることが出来、加之、家内中のものゝ着物を着る手傳までして呉れますと、母親は欣んで告げに来る。

◎發音の稽古で綴字を覺える

隣の子がリボン結びに夢中となり、容易に此方を見向きさうにもしないの

で、例のカードを手に持った兒は、猶ほ自分一人で『スベ〜』『ザラ〜』を繰返して居る。聽て是れにも厭きが來たと見えて、今度は座を立ち、自ら進んで、發音の稽古をして居る連中に加はつた。抑も兒童等が別に何等お定まりの綴字書を持たずに、後に至つて容易に日常の文字を認め得るやうになるのは、用意周到を極めた此發音の實習のお蔭であるのだ。由來伊太利語は發音通りの國語であるから、耳さへ少しく慣せば何人にも難作なく書ける譯だと云ふ人もあらうが、實は英國大使館所屬の『子供の家』でも、學童は何れも同一方法で英語を學び、日常の言葉を正確に書き得るやうになつたのである。

◎手觸りに依り圓も角も知れる

更に他方を見れば、今まで寢て居つたのか或は又思案に耽つて居たのか、兎に角デット坐つて居た年齢四歳の男の兒が、突然椅子を離れて、先生に何かさせて頂きたいと乞ひに來る。無論何を樂しみになるものをやつて見たいとねだるのである。そこで先生は棚の傍に其子供を伴ひ行き、一言入智慧を試みてやつたら、子供は少し經つて、莞爾に笑ひながら、木製の薄い四角な盆六七枚と、紺羅紗の布を手にして、自分の席へ戻つて來た。彼は傍に立つて見て居る人などには頓着せず、自分はもつと重大な用向があるのだと云はん計りの態度で、紺羅紗を机の上に擴げ、其上に、今持つて來た木製の代物

を二列に並べた。何れもピカ／＼と青色を塗つた木盆で、其中央には紺色の三角形、圓、長方形、角、八角、楕圓形等が畫いてある。跟いて来た先生は机の向側に立つて居る。先生は三角形を木盆から取り上げて其一邊を二本の指で撫でながら、斯うして撫でて見よと教へてやる。子供は嬉しうに手早く先生の教へた通りをやつて見せる。次で先生は青く塗つた木盆に嵌込みになつて居る三角、四角、八角、圓など種々の型を残らず抜き出して、一旦机の上でそれをごちや／＼に混ぜ、さて元通り木盆へ嵌めこんで見よと子供に命ずる。木盆中の型は真中に真鍮の鉤があつて抜き差し都合好く出来て居る。型を抜き取つた場所からは、下敷の紺羅紗が見え、一寸見ると、恰も型が半時程木盆から落ち凹んだ様である。子供が頻りと是を見詰めて居る内に、先

生は此所を去つて了ふ。「オヤ、先生は始めの方すらも教へては下さらないのですか」と、此時或人がモンテソリ女史に聞いたら、「我々の實用的教育の原理は、唯一筋に獨立の念を子供に吹き込むことにあるのです。子供は決して傍から助言されることを好みませぬ」と、女史は笑ひながら答へた。

成るほど、見れば子供の態度は至つて平氣なものだ。暫らくはデット目前に並んで居る木盆を見詰めて居たが、どうもまだ眼識が充分確かでないと思つて、ゴチャ／＼になつて居る型の中から、楕圓形を選び出して、之を木盆中の圓形の方へ嵌め込めようと試みた。是れでは到底嵌める筈がない。其中、半意識の様でもあつたが、ふいと、手に取つた楕圓形の周圍を其食指で撫で廻し、續いて圓形と楕圓形の脱けた木盆の穴縁を撫でた。これで漸く先の

手隅りに依り圓も角も知れる

間違も分り、今度は故障なく楕圓形を元の穴へ嵌め入れた。さうして次のものに取掛る前、自分の巧妙なる手加減を見て呉れと言はん斗りで、椅子にフン反り返つて居る。彼は無論首尾克く残りの分を嵌め込み、更に外しては、再び嵌め、回を増す毎に益々速力を加へて來た。

三角や、角や、圓など、取り外し自在の型を載せた此木盆は、『子供の家』に取つて最も有益な獎勵物であつた。是れを用ゐて、視覺と觸覺とが、いろいろの形に慣れて來る。原來子供等は、總ての形體をば、其實體を見たのみで総合的に合點するもので、之を認識するのに簡單な分解的の説明すらも決して聞いた譯ではないのである。モンテソリ女史は、特に此點を重要視してをられる。

『子供の家』で實習に用ゐる教育的遊戯の全部、或は一半を悉く此所に記す事は、餘り長きに過ぐるの虞れがある。唯、是に就て特に注意すべきは、モンテソリ女史が、各學校に庭園を附屬せしむるの利益をば、力を極めて主張して居ることである。蓋し子供等は庭園に出でて植物の發育状態を観察し、大に其成長を助けることが出来る。又庭があれば、各種の動物の世話を爲さしめ得る利益もある。

『子供の家』で用ゐるいろいろの器具類は、及ぶ限り、子供等をして自分の間違を自動的に正すことの出来るやうに造つてある。即ち、一目見て直ちに其出來榮の如何を判別なさしむるやうに出來て居るのである。次に五官の作用を發達せしむる準備練習は、是非とも各覺官を孤立せしめた方が利益で

あると、女史は極力主張して居る。例へば聴覺即ち耳の練習には、極く静かな、暗い部屋で行ふを以て、最良の方法とする。此の如く、實際視覺以外の覺官を發達せしむる上の練習は、子供に目隠しを施した儘是を行つて、往好成績を示すものである。嗅覺及び味覺は、子供の時代に於て比較的發達せぬものである。故に女史は、決して其練習に力を盡すに及ばないと言つて居る。聴覺は練習の力に依り段々發達せしめ得るものであり、また是非とも發達せしむべき筋合のものである。モンテソリ女史の經驗に依れば、ドノ子供でも音樂の調子を聴き分けはするが、天才でない限り、實際音の聴き分けは出來ぬさうである。

▲モンテソリ女史の教を受けた子供は目隠しの儘五穀の區別をする

觸覺の練習に就ては既に記した所もある。目を用ゐずして物を見るの技術は、目隠しをした子供が織物紙類の地合の極く微細の相違すら區別し得る迄にも發達した程である。目方の感覺も、又手觸に依つて固形物を識別するの能力も、格別の注意を以て練習すれば、追々發達する。目隠しの儘五穀の差別を正確に語ること、金銀銅貨の區別を爲すことも、差して難事とするに當らない。總て是等の辨別は、諸種の遊戯に事寄せて練習する譯である。眞中の目隠しを施された子供が、果して當るか外れるかと、周圍を取巻く

大勢の子供は、何れも片唾を呑んで控へて居る。

視覚の練習に關する機械は稍複雑して居る。先づ第一に、物の大小を區別する視覚の練習を旨とするいろいろな遊びがある。假りに説明の容易なるものを採つて一例とせんに、厚薄の區別には、厚さに等差のある同じ長さの四角なプリズム十枚を厚薄順に並列し、以て一の階段を作る。十枚のプリズムを厚さの順に應じて順々に並べると、丁度高さの相違で階段の形になる。此實物教育に依り、厚薄の區別は立ち所に分る筈である。長短の區別には、是れも同じ厚さの角定規十本を用ひて説明する。十本の角定規の厚さは、何れも同一であるが、長さは一々異なつて居る。即ち一メートルは十センチメートルに當るから、一番長いのが一米突で、以下一センチメートル宛短かくなり、

最短の定規が一センチメートルの長さを有する勘定になり、そして十本とも、一センチメートル宛青赤の色別をしてある。随つて、順序よく長短の定規を順に並べると、一センチメートル巾の青赤のダンダラが自ら出来る次第である。高低の區別も亦、一定の高低を有する積木に依つて説明し、大小の區別も同様小兒の玩具用に供さるゝ角木を利用して會得せしめる。若し夫れ色の區別に至つては、左に記す遊戯を應用して餘程精密の點まで區別させる。先づ濃淡各種の變つた絹糸を、色合に應じ、夫々平糸巻に巻いて置く。則ち、八個の原色と、一原色毎に附隨する八種の濃淡色を加へて、總計六十四色の糸巻が出来する。原色八種に對して、八名の兒童は中に机を取巻いて坐し、銘々自分の好む色を定めて置く。此時、既に用意してある六十四個の糸巻は、色別順

序等に御構ひなく、交せ混ぜの儘机上に盛られてある。八名中の年長者は更に又はを混ぜた上、七名の註文に應じ堆高き糸巻の山から、間違はずに註文通りの色を選出してやる。萬一色を選び損ずると、今度は同人の右側に坐する兒童が代つて選擇方となる。此の規則に隨ひ、机上の糸巻を夫々別け取つて了ふと、次は銘々其手に受取つた八種の濃淡色を、色合に應じ別々に並べ、一番手早く無事に是を並べ果せた者が、次回の選擇方となるのである。其他是れに類似の遊戯が澤山あつて、何れも兒童に色覺を完全に教へ込む。左れば是等の兒童は、大人ですら容易に鑑定のつかぬ鼠色の面倒な濃淡別けなど、譯もなく選り當てる程である。

○「無言遊び」

モンテソリ女史の發見に係る最も不可思議、且有益な新發見中、「無言」の教育的價値なるものがある。或る日、女史は學校の教室外で、未だ生れて四ヶ月目の嬰兒を伊太利風に抱いて居た一人の母親に、ユクリなく出會つた。此機會を利用して、女史は嬰兒を教室内に抱き行き、冗談半分、「御覽うしろ、是が實におとなしいもの、御手本ですよ」と云つて一同に示した。序に女史は、おとなしくすること、靜肅にすることなどに就て何くれとなく引き伸ばして、いろ／＼の御話を聞かせた。すると妙なもので、子供心の眞似辯がムラムラと起つて來て、おとなしさ較べなら、赤チャンに負けはせぬと云つた

鹽梅で、何れも水を打つたやうに静肅になつた。誠に其の効果の著しいのは驚くほどであつた。そしてそれ以來、『無言遊び』は、モンテソリ式各學校内に於て、最も人氣ある遊びの一たるに至つた。此遊びを行ふ時には、先づ子供等一同皆それ／＼定め席に着き、次に先生は、夫からそれへと、一々窓の兩戸を閉めて、室内を日暮方程に暗くする。斯うなると、年の行かぬ子供の中には、イツでも顔を手で隠すのがある。又中には、席に着いた儘、頻りに藻掻いたり身體を動かしたり、容易に落付かぬものもある。其中に室内は大分暗くなる。先生は廊下へ通する戸口から引き込んで了ふ。此時は、恰も多數の雛の塒につかんとする時のやうに、一番落付かぬ子供まで、段々静まつて来て、一同、チツト片唾を呑みながら、何時も始めてのやうな心持で、例

の『不思議』の始まるのを待構へて居る。應て室内が全く静まりかへり、現に傍にかけてある時計の針の音さへハツキリと聞えるやうになると、先生は戸の外から微かに小聲で、『太郎さん』と呼ぶ。太郎は自分の小さな椅子から出来るだけ、ソツト身を起し、爪先き歩みに室内を廊下へ出る。若し斯る折に、其の小さな靴がキユウ／＼とでも鳴らうものなら大事だ、折角先生が小聲で『お梅さん』ト次の番を呼んで居るのを、一同で一生懸命聴き取らうとして居る矢先だもの、定めしみんな厭な顔をして居るだらうと、當人大に氣が咎める譯だ。お梅さんは太郎さんよりも一層静肅に出て行く。今度は『二郎さん』と呼ぶ。すると變てこな子供が矢張り探り足でソツト廊下へ出て、前の連中と一緒に居る。先生は引續き、頻りと其小聲に不思議さを啣ませて、

彼は十二三人静肅に勿體らしく出て行くまで、次から次へと、子供の名を呼んで居る。是で遊びはお了ひとなる。少しでも長く氣のつまるやうな懸念のあるものは、『子供の家』には、一切禁物である。

其處で未だ名も呼ばれず、席に着いた儘取り残された連中は、次の時を俟つて、ドレ程静肅に室内を立去れるか、みんなに見せつけてやる事が出来るのだと、それを樂しみにして居る。

此遊びが終ると、兩戸を再び開けて、元の通り室内を明るくする。小さな舌は又もや、其處此處で動き始まる。それにしても、此遊びの御蔭で止め度なき騒ぎを一時静めることが出来て、教室内は再び静謐安穩の状態となつたのである。

時に依ると、一日に二回も此遊びをさせて下さいと、子供等にせがまれる場合もある。由來伊太利の子供等は、歐羅巴中で最も騒々しい國民に屬して居る。然るに、それが此通りであつて見ると、此遊びの成功は、慥に読み書き以上であると斷言しても、敢て差支あるまい。

◎母親は其子供等に手習を教へてくれと女史に迫る

モンテゾリ教育法としては、固より當然の結果に外ならぬ次第ではあるが、兎に角、何等の無理も骨折もなく、子供等に文字書く術を教へ込んだことは、慥にマリア・モンテゾリ女史の手で擧げた成績の中最も顯著なるものであり、

母親は其子供等に手習を教へてくれと女史に迫る

且つ又最も目覚ましきものであつた。

女史が初めて子供等に読み書きの道を授けやうとして、其方法に思案を向けたのは、『子供の家』を開校してから六ヶ月後、實に千九百七年（明治四十年）の七月、暑中休暇中のことであつた。無論女史は初めから此事に大不賛成であつた。未だ脳味噌の硬まらぬ頑是なき七歳以下の子供等に、斯る骨折を強ふるのは、到底自分の忍び得ぬ處だと、深くも思ひ込んで居たのだ。すると、肝腎の子供の方から、教へて下さいと云ふ退引ならぬ請求が出て來た。中にも優れて読み書きに執心の子供等は、是れ此通りと、一生懸命、女史に見せやうとして、頻りに〇の字を何遍も黒板へ書いて居た。其内に子供等の母親連からも懸合が來た。別に骨を折らすに、『子供の家』で一切外の事を覺

え込んで了つたのに、何故読み書き文は教へて下さらぬのか、誠に合點の行かぬことだと云つて、校長の女先生へ迫つて來る。『市中の外の學校では、逆も是程容易くは覺えられませぬ。現に今年九歳の三郎は、市中の公立小學校で無理に習字を強ひられて、一と晩泣き通した程です、』など、云つて來る。斯う云ふ根氣の良い母御達に見込まれては、流石のモンテゾリ女史も、勢ひ落城せざるを得ぬ。斯くて女史も、終に當初の決心を翻へすの已むなきに立至つたのである。殊に攻め寄する母親連の作戦巧妙を極めた御蔭に、女史自身は今却て、或は職務を怠つて居たのでは無いかとまで懸念するやうになつた。

無論女史は、在來の習字法の如く、斜に線を引いて、更に其線の先を曲げ

母親は其子供等に手習を教へてくれと女史に迫る

たり、伸ばしたりする様な文字の書き方で、何週間何ヶ月と、罪なき子供を苦しめるのは絶対に反対で、且つその徹頭徹尾、無理の骨頂である所以を明白に指摘した。字劃を一々説明して手習を教へるのは、恰も口を利かせる前に、文法を教へ込むのと均しく、愚を極めたものだと言ふのが、女史の意見である。鍋鉤、折れ釘、吊し手のやうな文字の各部分は、言はゞ手習の文法とも云ふべき格のもので、手習其物には何の必要もなく、結局事後の説明で澤山なるべき筈のものだ。それに、文法を一通り心得て置くことは、正確に口を利き、文章を書くに必要な條件であるけれど、出来合の文字の儘で手習を稽古したものには、別に手習の文法とも云ふべきものゝ必要はない。

是より先、女史は低能兒に手習を仕込むため特に器具を工風して、是を用

ゐたことがあつた。然し乍ら、如何にせん、此器具は却々費用も掛り、且つ場合に由つては役に立たぬこともあつた。最初是に用ゐたのは、木片へ念を入れて文字を彫り刻んだものであつた。其次にはボールの臺紙へ、色紙の文字を切り抜いて貼りつけ、其上を最初は食指、次は食指と中指の二本で撫でさせ、更に最後には、運筆を覚えさせるため、小さな箸で文字の上を杯らせたのであつた。女史は此方法を用ゐて、豫期以上の困難もなく、一部の低能兒等に巧く手習を覚え込ませたが、同時に又手を取つてやらぬと、逆も文字の見當さへつかぬ連中が多数あつたのだ。此理由に依り、右の色文字利用法は、普通兒童の自發的教育には到底向きさうに思はれなかつた。それに第一、間違つた場合、指の働きを正す自働的方法が缺けて居る。殊に傍見をして

居る子供の指先が、貼りつけた色文字の上を離れても、是れを自然に氣附かせる事の出来ぬ缺點がある。

其處で女史は、倦まず撓まず、随分色々と考え案も工風も凝して見たが、何分一として自分の意に満ちたものはない。處が、或日のこと、何氣なく例の二枚のカードを用ゐて、ザラ／＼とスベ／＼の區別を教へる手解きの稽古を監督して居る内、フト此問題が神様の御告げでもある様に、獨り手に解決がついた。翌日をも待たず、子供等の授業が済むと、其夜直ちに、女史は教師等と一緒に、ザラ／＼する鑢紙の大文字を造り、是を一々極く滑らかな四角の臺紙へ貼付けた。書體は當時流行の、フツクリと丸味を持つた鑢字の草書體で、外の文字との組合せに都合の良い様に、一字毎に小さな尾をつ

けて置いた。臺紙の値段は頗る安かつたので、入用に應じ、思ふ存分澤山造ることも出来た。殊に補助として、其後紙製の切抜き文字を別に數多く造り置き、子供等が机の上で文字を綴り合はせる時の用に供したのであつた。e i o u の母音五文字は特に薄赤の用紙を用ひ、子音の文字は悉く青紙を切り抜いて造つたものだ。切抜き文字の裏へは、一々中心點に細い白ボール紙の帯を横に貼りつけて、字列の案内線として置いた。假令ば、g 文字の底と o 文字の底とを同一線に列べたがる様な場合があつても、裏の案内線を頼れば、間違はずに字列を正すことが出来るやうに拵へた。

中央に三角、四角、圓など種々の模様をくり抜いた、嵌め外し自在の木盆に就ては、前々既に記す處もあつたが、圖らず女史は、此木盆の利用に依り、

母親は其子供等に手習を教へてくれと女史に迫る

嘗て、低能児の教育に際して、取り分け困難であつた運筆の手加減を、首尾よく會得せしめたのである。子供といふものは、大抵何といふ譯なしに樂書を好む癖がある。そこで女史は、此性癖を巧みに利用しやうと決心した。即ち例の木盆の下へ一葉の紙を布き、中央の木型を抜くと、下から紙が見える。その見える部分を、色鉛筆で、縁を頼りながら木型通りに埋めさせる。成程此方法を実行して見ると、驚く程結果が良い。子供等は子供等で、我ながら上手に三角や、四角や、眞丸が描けると鼻を高くして居る。無論、始めの内は、筆の運びが不図で、肉の厚薄は免かれなかつたが、争はれぬもので、其内には追々と子供の目も慣れ、自然に不同を看破するやうになつた。随つて鉛筆の力の入れ方を自から呑込み、墨色が好く均されて平になつて來た。木

盆の内縁を頼つて一と通り筆の運びがついて來ると、今度は一歩進んで、先生がザツ鉛筆で輪廓だけを紙に記し其内面を子供に埋めさせるのだ。木盆と異つて、何分頼りがない。然し十中八九までは、鉛筆の線を一度も踏み出さずに、内部を塗り潰すことが出来る。最早斯うなると、小手先がチャンと定まり、鉛筆でもペンでも自由に使へるやうになつて、指尖を癢らせずに書ける譯だ。

◎切抜き文字で言葉を組合せる

子供等は、何れも自分の習はうと思ふ文字を、銘々選り出して來る。不思議と初心者に一番評判の宜い文字は、iとoである。箱の中から、自分の好

大きな文字を選び出して、先生の許へ持つて来ると、先生の方で例の白ボールの臺紙へ貼りつけた、黒紙の同じ文字を子供へ渡してやる。是を手取る。と、子供の指先は、黒紙の文字の上から下へ筆法の通りに撫で廻はす。無論先生は「撫で、御覽」と云つて居るのだ。次いで其文字をアイならアイ、オーならオーとハッキリ何遍となく發音して聞かせる。子供には成るべく、文字を一々よく見るやうに、傍から舵を取つてやる。是から先は、例の普通の順序で、御稽古を續けるのである。先づ先生の方で「アイの字を頂戴」、其次が「オーの字を下さい」と云ふ具合に出る。更に今度は、「此字は何んと云ふ字？」と先生の方から子供に一々尋ね、是で此御稽古は御了ひとなる。子供には、始めに小さな文字を克く覚え込ませ、次に大きな花文字に移ると云ふ

順序である。それにしても、決してエー、ビー、シーの順序通りに教へるのではない。手當り次第、何れの文字でも、一々離して覚えさせる。

子供が文字箱から文字を選び出すのを、傍で見ると實に面白い。彼は幾つにも仕切られた文字箱の中を、アレかコレかと頻りに見廻はして居る、そして其小さな唇は、自分の求むる文字の名に當りをつけやうとして、微かに動いて居る。既に發音の稽古をしたお蔭で、文字の判じ方も早い。或る日、モンテソリ女史は、未だ漸く四歳位の飄げた子供が、指尖で文字を書く真似をしながら、小聲で「玉子と云ふ字は、タの字に、マの字に、ゴの字だよ」と半分歌ひ調子で飛び廻はつて居るのを見た事があると話された。聽て二三分も経つと、此兒は椅子の上に乗せてあつた文字箱の許へ来て、少しも間違

はずにタの字と、マの字と、ゴの字を選び出し、無邪氣に板の間へ寝ころんだ儘、チャンと順序通り文字を列べたさうだ。

◎子供等は少しも習はずに文字を書き出す

借て、子供等の筆を握る指も、已に例の木盆内の木型の嵌め外しで一通り仕込まれては居るし、それに目は固より、筋肉の調子までも、文字の形に慣れては來たが、それでも彼等自身には、未だ文字を書けると云ふ事に気がつかない。實を云ふと、彼等は書かずに、書くことを覺えたのだ。實に此事は餘りの大成功であつた丈に、女史自身にも最初は寧ろ意外の感があつたさうだ。斯くて女史が始めて自分の夢想の事實となつた場合を敍したページは、

教育史上正しく後世の範とするに足るべきものであらう。

『時は十二月の某日、正に是れ冬晴れの伊太利日和であつた。私は此時、丁度學校の屋上の廣場に出て居つた。私の附近には、子供等が頻りと遊び戯れて居る。私はフト自分の横に立てる煙突を見て、何氣なく傍の五歳の男兒に向ひ、『此煙突を描いて頂戴』と云つて見る氣になつた。同時に白墨を此兒に渡してやると、彼は直ぐに板の間へ寝ころんで、稍形を備へた煙突然としたものを大得意で描き始めた。私は平時の通り大に寝てやつた。すると、子供は私の方を向いてニコ／＼しながら、正しく胸を突いて來る嬉しさに聲を張り上げやうとして、急に、『先生、僕は字を書けますよ、今是从から書きますよ』と叫び出した。彼は身を板の間に投げ出して Mano (手) と書き、更に

子供は少しも習はずに文字を書き出す

得意となつて Camino (煙突) と書いた。彼は書きながらも、頻りに「ソラ又書きますよ」と言ひ續けて居る。此聲を聞きつけて、近くに遊んで居た子供等は、皆悉く見物に集まつて来た。そして何れも目を睜つて驚いて居る。その時見物中の二三人は、恰も何物にか打たれたやうに、身を震はして私に近寄り、「先生、先生、どうぞ私にも白墨を下さい、私も書きたいのです」と云ひ出した。白墨を手にするや否や、何れも mamma (母) mano (手) Sirio Camino (煙突) ada など、色々の言葉を書き出した。

爰に特記して置たいのは、是等の子供等の中一人として、今迄に白墨なり鉛筆なりを手にした事の無かつたことである。但し、既に記した木盆内の輪廓を塗り潰すために用ゐた、色鉛筆だけは別であるが、兎に角、彼等が文字

と云ふ文字を書いたのは是が始めてである。殊に始めて聲を出して、讀んだ時と同じく、各語を一々發音しながら、立派に是を綴り合はせたのである。

右の様な次第で、我々一同、子供等の文字書く術の自然の手解を見て、實に感動すべき經驗を得たのである。始めの内は、丸で一切夢ではないか、奇蹟ではないかと思つた程で、唯モウ驚嘆するばかりであつた。

◎全校悉く手習熱に罹る

今は全校悉く、習字熱に捕はれた形となつた。子供等は、銘々天から授かつた一の技倆に漸く氣がついて、何れも鼻高々である。彼等の小さな頭には、容易に「支度」と「仕事」との関係が分らない。そこで、文字を書ける

やうになつたのも、畢竟は最早大きくなつた御蔭である、身に力がついて歩
けもし、口も利けるやうになつたのと同様、育つたから字が書けるのだと、
罪もない考を抱いて居る。此の事實は、豫め彼等の柔かき脳髓に、何等の
無理も強ひられて居なかつた、明らかな證據ではないか。』

子供等は、新たに此天授の技倆に氣がついて見ると、嬉しくて堪らぬ。當
分の間は、家へ歸つてからも、板の間は更なり、パンの皮に至るまで、白墨
で樂書をする。其處で餘儀なく、母親達は自衛上、子供等に鉛筆と紙をあて
がつてやると、何れも喜び勇んで、毎晩寝るまで書き続け、猶それでも飽き
足らず、更に翌朝目覚め早々書く事の出来るやうに、大事の二品を寢床へ持
ち込む始末であつたと、母親達が染々喜んで學校へ知らせに來た。

是につけても、如何に觸覺の作用が萬事に大影響を與へて居るかは、左の
一小例に徴するも明らかである。或時、ジョゼフイン、トウジャ嬢と云ふ米
國の教育家が、『子供の家』へ態々參觀に出掛けて、發音の御稽古を聞いて居
ると、年嵩の一少女は何を思つたのかツカ／＼と珍客の案内をして居たモン
テソリ女史に近寄り、小聲で頻りに何か聞いて居た。女史は向き直つて同様
小聲で二言三言さゝやいた模様であつた。それも一つ言を三度も繰返した程
緩りと克く念を入れて居られた。子供は手の先で文字を書く眞似をしながら、
大急ぎで机の上の例の文字箱へと走り行き、二個だけ文字を拾ひ出して、今
度は黒板の方へ急いで引返へして來た。未だホンの子供だけに、椅子へ乗ら
ぬと黒板へ樂には手が届かない。聽て見て居ると『ジョゼフイン、トウジャ

娘を歓迎す』と、一字も誤らずに白墨で記した。尤も途中で、頭文字のシの字とトの字を切抜いた例の鏡紙を指尖で撫でるため、チョット躊躇はしたが、然し何の故障もなく行き果せた。黒板へ文字を書く前に、文字箱から拾ひ出した二枚の文字カードは、頭文字のシとトであつたのだ。蓋し、頭文字の稽古は、一番後廻はしにする關係上、小文字程克くは覚えて居ない。其處で觸覺の作用を頼り、指尖で撫でながら、記憶の補ひとしたのである。

○四歳の子供等は六週間で文字が書ける

支度に取りかゝつてから書けるまでの時日が、通例、四歳の子供で一ヶ月半、五歳になると幾分か早く、一ヶ月もあれば充分である。中には僅か二十

日間で、エー、ビー、シーを残らず書けたのもあつた。年齢にも依るけれど、普通の子供ならば一ヶ月か六週間も経つと、自分の書きたいと思ふ簡單の言葉は書けるやうになる、それも多くは主にインキで書き始める。大多數の子供も、三ヶ月後には餘程上手に書いて来る。書き始めから六ヶ月目の子供は、市中の公立学校の尋常三年生位には上達する。事實、『子供の家』で一番容易でもあり、且つ一番御得意であるのは、手習其ものである。

手習から讀方へ移るのは、傍で想像する程、右から左へ無雜作に往くものではない。無論自分で書いた語は、どの子供でも常に發音が出来、然し女史の主張に依ると、是丈では決して讀方と云ふ譯には行かぬ。單に形を音にしたまでの事である。假令ば手習の際に、音を形に直したのと意味は同一で、

モウ森に子供は其語を知つて居て、是を書くまでに、胸の裡で何遍も繰返して居たのだ。然るに眞の讀方とは、肉筆又は印刷した字體から、豫め心得て居らぬ意味を絞り出す技術である。

子供が組合せ文字を列べて、語を組立てる時、若くは其語を書く場合には、思案と選擇に充分の餘裕がある。處が讀方になると、他人の手で選擇して列べた文字を、突嗟の間に解釋せねばならぬ。尤もモンテソリ式の手習法は、讀方を教へる時大に便利とはなるが、然し決して兩者は同一視の出來ぬものでもあり、且又、時を同うして此二つの能力を獲得する譯には行かぬものである。

○遊びに事寄せて讀方を學ぶ

讀方を教へる際、女史は在來の綴音表に依る『エービー、アツブ』とか、『ビーエー、ペー』とか云ふ方法は斷じて採らぬ。女史の式に依れば、ボール紙へハツキリとした走り書の草書で、既に子供等の知りきつて居る語（主に日用品の名稱）を記すのである。字義の解釋がついたなら、成るべく其語を記したボール紙を實物の傍に添へて置く。椅子でも、机でも、總て手近の物體は直ちに利用が出来る。幸ひに『子供の家』には、大部分の日用品が、實物若くは玩具の形で、一と通り揃うて居るから、此邊の便宜は申分が無い。平易の語と、難解の語とは、決して區別をせず、如何なる語でも、普通の伊

太利文字で綴つたものなら、此子供等の如くエー、ビー、シーの効能さへ心得て居れば、容易に解釋が出来る。但し目慣れぬものには、短かい語よりも長い語の解釋に、骨も折れ時間もかゝること勿論である。讀方の御稽古には、凡そ左の如き遊びを利用すると、早く目的を達せる譯だ。それに多くの子供等は、瞬く間に此讀方遊びに加はる丈の智慧がつく筈である。

先づ大きな机なり、臺なりを用意して、其上へ學校中の有りと有ゆる目星しい玩具を積上げる。玩具の名稱は一々小さな紙へ認めて、是を辻うらのやうに折りたゝみ、悉く袋の中へ入れて置く。子供等は銘々袋の中から辻うらを選び出して、誰にも見えぬやうソツト自分で開けて見る。そして若し紙に記してある語を明瞭正確に發音し得たならば、其紙片は恰も通貨同様のものと

なつて、兎に角其日一日丈は、それに記してある玩具の損料に充てることが出来る。

此遊びの成績は、考案者の豫期以上に出で、子供等は何れも玩具を受取らうとはせず、繰返へし辻うらを抽いては、讀方の稽古をしたがるのであつた。單語から一步進んで單文へ移るには、例の必要缺くべからざる黒板を利用するので、先生が簡単な質問又は命令を書き記すのを見て、子供は質問なら口頭、命令なら實行と、夫々要領を得させる。言はゞ一種の會話とも云ふべきものだ、先生は文字で語り、子供は口頭と動作で挨拶する形である。

長文句の御稽古には、同一方法を引伸ばして利用する迄である。即ち多種異様の命令を、多数紙に認めて子供等に配る。假令ば、一番良く唱歌の出來

生徒三名に、室の中央へ進んで貰ひ、一列になつて、アナタの好きな面白い唱歌を一緒に歌つて下さいと、云ふやうなことを記して置く。子供等は、此命令書を手にして、暫らく黙讀して居る。其内に先生の方から、「分りますか？」と聞く、そして若し一同「ハイ」と答へたなら、「では御始なさい」と促がされる。斯うなると、勢ひ今迄息も洩らさずに静まつて居た室内は、急に賑やかな太陽氣の光景に變るのである。

斯くの如く、モンテソリ教育法は、及ぶ限り子供等の自然啓發を促がし、幾多の合理的器具を用ゐて、舊來の強制手段を絶対に避けんとするのである。そして子供等は、何れも知らず識らず己れの欲するものを、種々の玩具及び遊びを通じて、自然に會得するやうになる。

◎子供等は自分で着衣も入浴もする

場合に依り、『子供の家』へ入學した生徒は、玩具を用ゐて實際の稽古を受ける前、五六週間は何もせずに居る事がある。尤も色々の遊びに加はつたり、日常の作法を教へる一同の席へ出たりしても別に差支はない。要するに先生の方で五官の啓發に手を着ける時期までは、當人の自由に任して置く。五官の啓發とは、例の觸覺の働きを良く導くこと、即ち『スベ〜』と『ザラ〜』の御稽古である。前にも悉しく記した通り、此學校の規則に依ると、各生徒は必ず登校の際、身體服裝共に清潔なるを要する譯になつて居る。故に登校の際挨拶が済むと、直ちに此邊の検査が始まる。

子供等は自分で着衣も入浴もする

女史は、其著書に於て、右に關する左の諸則を定めて居る。
 子供が登校したら、第一其身邊に關する清潔如何の検査を必要とする。能
 ふべくんば、此検査は母親達の目前で行ふやうにしたい。子供の齒、爪、首
 筋、耳、顔、及び兩手等を良く検査し、殊に頭髮の清潔加減に注意してやる。
 萬一着衣が汚れ、綻び、裂け、埃にまみれ、若しくは紐釦等が取れた儘で居
 る時、又は靴が綺麗に磨けて居らぬ場合などには、親切に穩に是を子供に言
 ひ聞かせる。更に子供等同志の間にも、各自の清潔に注意するやう上手に舵
 をとつてやる。但し如何なる場合と雖も、口汚く是を罵り合ふことを許して
 はならぬ。斯くして、子供等は自然に他人の様子を見て、自分の身邊に注意
 を加ふるやうになる。

總じて子供は水遊びが好きである。殊に石鹼があると一層の御樂しみとな
 る。此性癖を巧みに利用すると、極く年の行かぬ子供までが、手や顔を進ん
 で洗ふことを、一の清潔法と心得て來る。如何にも鹿爪らしく勿體をつけて、
 多くの子供等が顔や手を洗つて居る様子は實に見ものだ。

着衣・身體等、身邊の検査が済むと、子供等は互ひに手傳うて、前垂の釦
 を掛け合ふ。

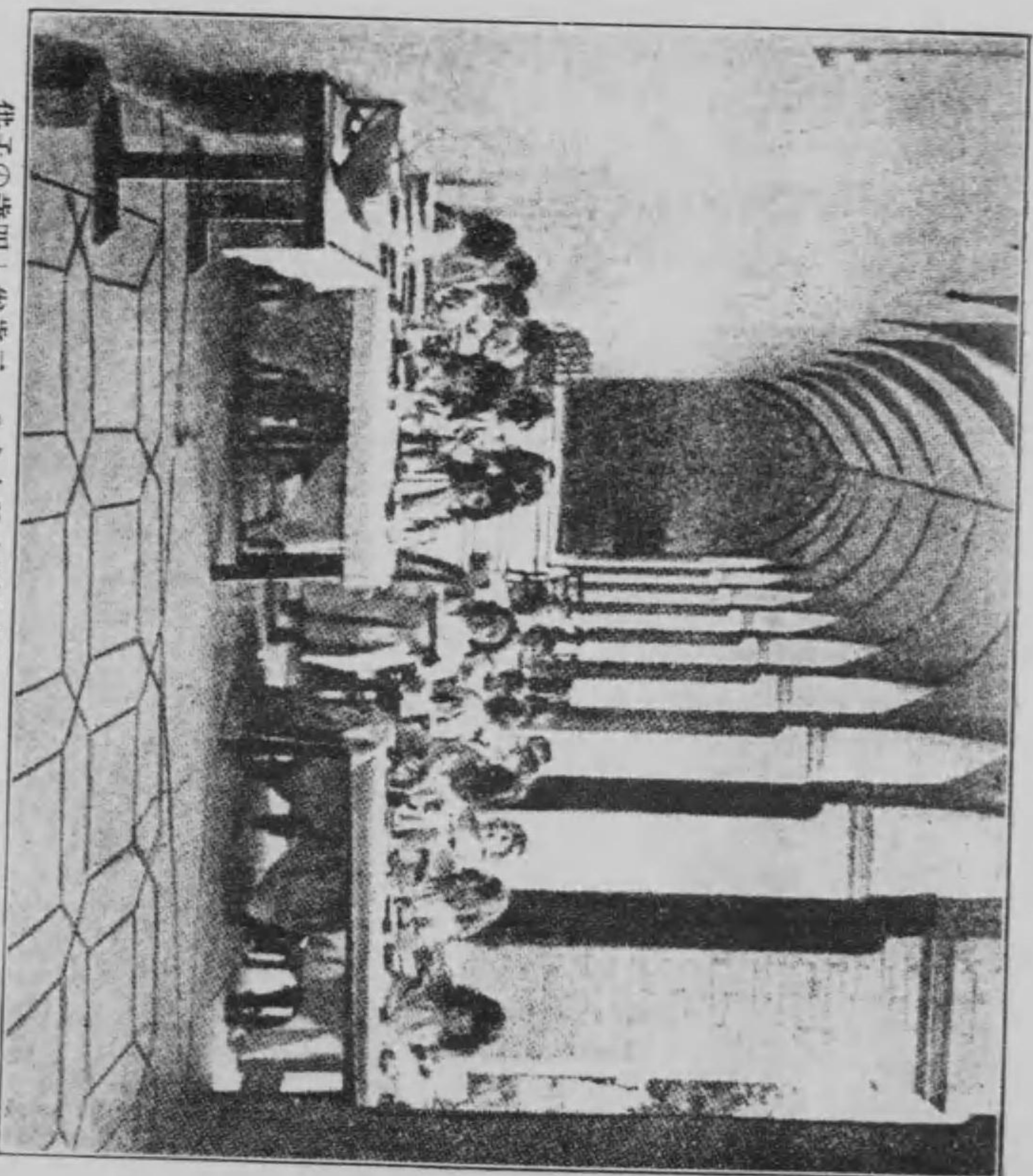
女史は、子供等の四肢や全身の筋肉を、平均に發達せしむる目的で、簡單
 な體操を工夫した。是も然し、一度にホンの數分間宛のことにして、決して
 子供を疲勞させぬ。先生はそれからピアノの行進曲を奏する、子供等は是に
 伴れて列を作り、左り右を行る。尤も歩調を揃へるには及ばない、唯だ左右

子供等は自分で着衣も入浴もする

左右で一列に歩けば結構である。次に譜を變へて種々と、幼稚園式の『廻れ廻れ』などを行らせる。

◎四五歳の子供は立派に御給仕もし皿なども洗ふ

以上記した各種の遊びの外に、チャンと定まつた日課がある。その一例を云ふと、御挨拶の御稽古などもあり、更に又、皿の上へ最初は空コップ、次に滿杯を載せた儘、附近の朋輩に恭しく是を捧げ、先の子供は感慙に右のコップを受けて、外の子供へ同じ様に渡すなど、恰も禮式めいた學課もある。行儀よく三四分間椅子へ腰を下し、一旦立つて再び椅子に着くなどの御稽古もあつて、室内の起居動作を、上品に落付いて行ふことは、一々學ぶので



供子の歳四と半歳三。あちも時々頂を飯午で校事り依に合部は等使子
(照參頁二八)。居てしな日給御くし々々斐甲は



居てしむ乾ひ拭な鉢小皿で庭の校學リジヤンモ、が供子の歳五と歳四
モ、に處る居てつ扱取となげな危もし少な類物は溜る滑ルワルツ。る
(照參頁二八)。る居てれば現が長持の背教リジヤン



別り盛なアツソに等供子の同ーらか中の鉄アツソなき大は供子の幾四
(照参頁二八) かいなやちとこす零てつた滴ーらがなり標、がる居てけ

ある。モンテゾリ式の學校では、机も椅子も作りつけの儘にはして置かぬ。手輕に雜つと作つた家具類は、何れも子供の手で自由に持運びが出来ぬ。モンテゾリ女史の説に依ると、家具を配置した室内に於て、起居振舞に注意を要すべき明白の理由がある場合には、克く教へさへすれば、子供等は必ず其通り實行するに相違ないと云ふことであるが、成程事實は是を證明して居る。

女史は元來、學校の時間を長くすることに賛成だ。是は附近の狀況に依り夫々不同は免れないが、幸ひに授業時間を長くして差支ない學校になると、午飯を一同で會食する定めである。此場合には、食卓の支度、御膳の給仕、皿類の洗ひ方、其他附屬の仕事一切、悉く嬉々として勇める子供等の手で辨

する習慣になつて居る。毎朝子供等は小机の廻りに集まつて、其上に載せてある割役書、即ち給仕、皿洗ひ、其他午飯の持役を豫め記した役割を見る。そして文字を読める子供は、聲を出して一々姓名を読み上げる。一番小さい子供でも、手足が上手に利き、皿の上にコップを載せた儘樂に運べて來ると、もう給仕の資格が立派につくのである。

寫眞にも説明してある通り、現に四歳と五歳の二少女は、一生懸命になつて、皿小鉢を甲斐々々しく拭き清めて居る。而も又、大人も及ばぬ巧者さ加減で、隅々まで綺麗に拭き磨いて居る。未だ年端も行かぬ子供等でありながら、如何にも落付き拂つて、是等のツルツルした持ち惜い皿小鉢を、樂々と扱つて居るのは、正に五官啓發の良果を示した適切の一例であらう。

巧く給仕が出来さへすれば、食卓に着いてナイフ、フォーク、匙などを扱ふのは何でも無い、又落ちこぼれたパン屑などを、掃き寄せる筈の手捌きも器用に出來る譯だ。要するに筋肉の作用は何れにも同一である。

何れの「子供の家」でも、最新式に依る子供の健康表を作り、是に直接の關係事項を悉く記入して置く。毎月一回、子供の誕生日に相當する日を以て、直立、着座、兩様の身長を量り、また毎週一回、子供の生れた日に體量を計る。毎年一回、子供の誕生日には、醫師の手で一層立ち入つた詳細を検査登録する。即ち、身體各部の寸法、頭髮の色、其他の特徴、及び健康状態等に關するものである。抑々女史の生國伊太利では、不思議にも誕生日を無視して居る。隨て斯の如く誕生日を中心として一切の身體検査を行ふ時

は、年齢の觀念を深く子供等の腦裡に印する譯になる。誕生日を忘れない以上、年齢を忘却する筈はない。

此所に記した様な他愛もない簡單の動作中に、教授用具を用いた稽古の效驗は自然に現はれて居るのである。

◎指尖の働き

モンテソリ新教育法に據る日常生活法實習用の器具中には、前にも記した通り、木製の刺繡用の枠に革や布片を左右二枚縫つけたのがある。是等の布片には釦、鉸具をつけたもの、釦孔の明けたもの、單に紐のついた儘のもの等、數々の種類がある。何れも子供に、紐の結び方、釦掛け方、レース紐の



にり類、てて見と服衣を片布るあ(け)にに刺繡刺が俵子の歳四と半歳三
(照參頁六八) する古袴な方の結の紐、や方めはの釦

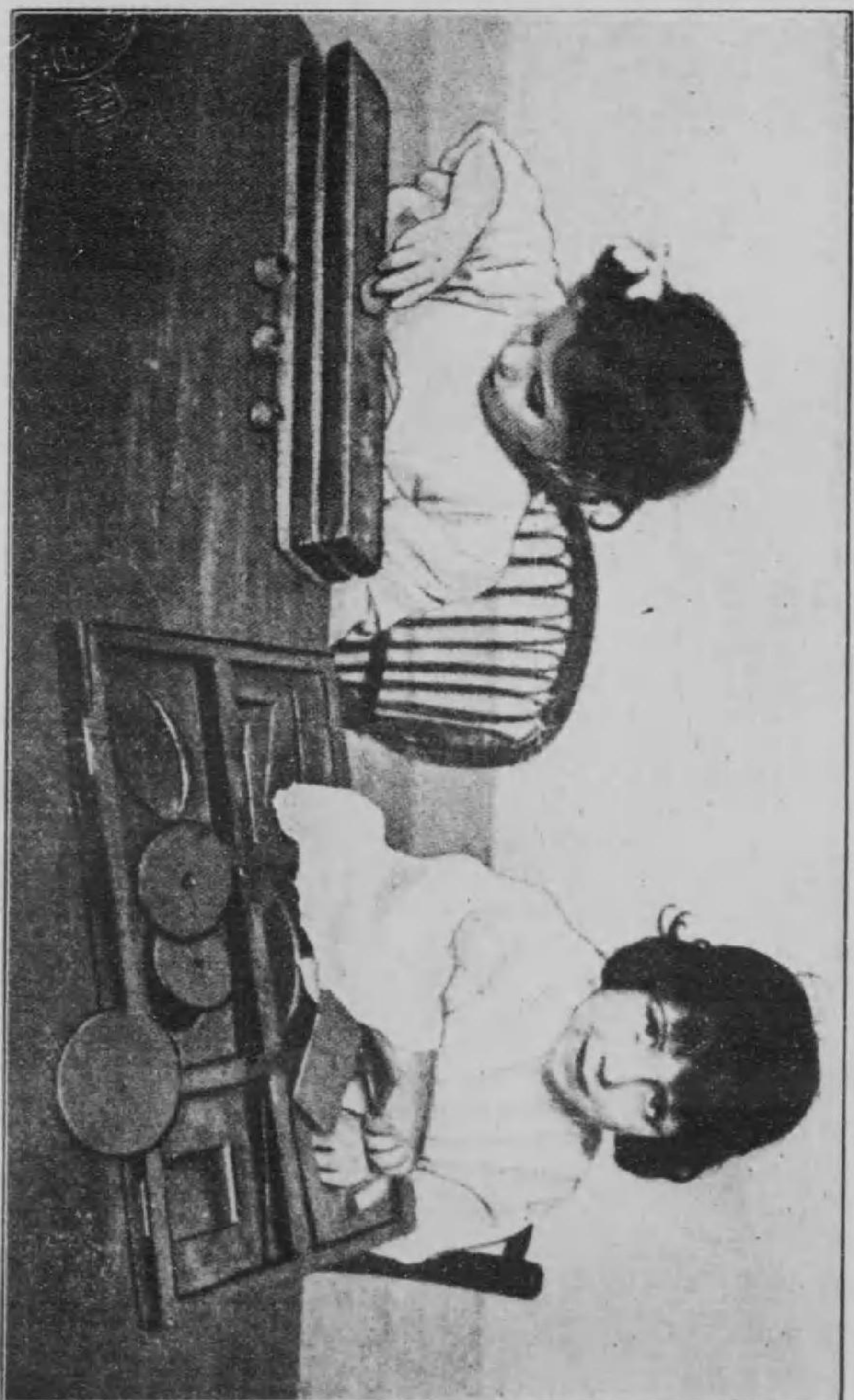
締め方などを、遊びの傍、知らず／＼覺え込ませる巧妙な工風である。子供等の様子を見ても容易に解る通り、如何なる玩具も、此刺繡梓遊び程人氣あるものは、チョット他に無いやうに見える。年端も行かぬ頑是なき子供等が、大人振つた態度で、目に見えぬ靴の紐を結び、身につけぬ衣服の釦をかけて居る具合は、恰も生活の糧を得んとして、仕事に餘念なき大人その儘である。某侯爵家の三男で今年五歳になるのは、金に飽かして有りと有ゆる玩具を室一杯に仕入れて居ながら、是等には少しも目をくれず、唯モウ夢中になつて此刺繡梓に氣を奪はれ、そのお蔭で立派に靴の紐を結べる様になり、尙ほ襦衣の釦など人手を俟たず、可愛らしいその指尖で始末し得る程になつた。小さい赤靴の紐を二重結びに締め、兩端を蝶羽根然と巧みに揃へるところなど、

實に御手に入つたものだ。

此お稽古の外に、さまざまの簡単な實習法がある。此等は何れも、モンテソリ女史の謂ゆる「感覺教育の根柢」たるべきものである。重複ながら順序を逐うて、是を今一應説明して見たいと思ふ。

◎木製のソリンドル(分銅)

入學早々、子供の手へ渡る玩具兼用の實習具に木製の丸木がある。是は木製の丸い分銅様のもので、十個一組になつて居て、一列に穴十個くり抜いた一枚の板へ差し込みになつて居る。恰度藥秤屋の秤り臺の如く、大小の分銅を收容する穴が明いて居る。此木製の丸分銅十個を一組としたものが、凡そ



(照參頁八八)みだし挿の銅分 と(照參頁二四)め炭型の盆木

三組若くば四組程子供の手へ渡る都合になつて居る。多くの場合は三組、即ち十個宛嵌め込んだ板三枚に限られて居る。其中の一組は、十個共高さが同一で、丸味、即ち徑が一から十まで順々に大小の相異がある。次の一組は同じ丸さで、高さに順々の高低があり、第三のものは、高さも、丸味も、悉く違つたもの許りである。分銅の上には小さな真鍮の釘をつけて、板の上の穴から抜き挿しの便利に供する。全部木製だけに目方は至て軽く、ホンの子供にも持運び自由である。女史が此用具を發明した動機と云ふのは、總て細細したものを一列に並べる子供の天性に、ふと氣がついた爲である。

さて子供は、此用具を手にすると、最初は何の氣もなく分銅を残らず穴から抜き取り、机の上で一旦皆打ち雑せる。そして更に又それを大小と高低と

に従ひ、それ／＼所屬の穴へ挿し戻さうとする。畢竟大きな分銅は小さな穴へ嵌らず、高い分銅は浅い穴に落ちかぬ。そこで人並の子供ならば、即座に此の事に気がついて、譯もなく間違を正して了ふ。二度三度と間違はぬやうになると、後は至極容易に出来る。定めし子供等に飽が来て、見向きもせぬやうになるかと云ふに、不思議な事には、何十遍は愚か何百遍となく繰返して、少しも退屈する様子が無い。首尾よく嵌めては、又ガラ／＼と机の上へ分銅をあげ、續いて根氣能く指尖を働かせて居る。結局指尖の筋肉が慣れて来て、始めのやうに、指尖を滑らしたり、分銅を落したりせぬ。

◎廣い階段に長い階段

分銅の抜き挿しが済むと、次は「廣い階段」と云ふ實習に取掛かる。是を造るには、木製の分銅如き小さなものでは出来ぬ。寫真に示すやうな大きな角材を用ゐて行る。大きいと云つた處で、其中の一番大きいのが、普通の煉瓦の半分位でもあらう。以下同一の長さで高低の差ある九枚の角材を、順序よく列べて階段を造るのである。何分此實習法は、目の働きを專一とする關係上、勢ひ用具を態と大きくする必要があるので、「分銅遊び」は、否應なしに間違の正せるやうに出来て居るが、「廣い階段」にはその便宜がない。子供の判断次第で、場合によるとテコボコの階段が出来ぬとも限らぬ。されば此實習の出来榮如何は、一面また、子供等の五官發達の階梯を示すものとも云へる。

『長階段』は、子供等のチョット見には、單に長短の差別ある一束の角定規に過ぎぬけれど、其實、加減乗除の土臺は是に依つて築かれるのである。是は青赤染分けの定規をダンダラに並べて長階段をつくるのである。

以上三種の實習は、子供等に、指尖の感覺と、視覺とを通じて、事物の形狀大小を差別せしめる目的を以て工風されたもので、此三種の實習に依り會得した知識を應用して、最後に『塔』の組立と云ふ實習を行ふ。首尾克く『塔』を築き上げるには、最初一番大きな角材を土臺用を選び出す必要がある。故に若し、子供が何の躊躇なく、直ちに土臺用の角材を手にしたならば、それは儘かに其兒が物の判別力に大發達を爲した證據と見ることが出来る。



(照參頁一九) 供なきな念除に立組の「長階段」と「塔」の築き

◎次郎さんの實例

始めてモンテゾリ式の教育法を受けることに成つた次郎さんは、如何にも元氣で且つ發明な兒であつた。然し元來がソワ／＼した性質で、注意を一事に集注する能力に缺けて居たので、其遊び振りは甚だ不規則を極め、『廣い階段』『長階段』等を作る時でも、材料の角材や角定規をチャンポンに雜せて容易に纏まりがつかない。彼には規則正しく、順序に隨ひ、階段を組立てるところが逆も出来なかつた。そこで或日のこと、先生は左の方法に依つて次郎に教へて見た。先づ例の通り、室内に敷きつめた絨氈の上へ一同で寝ころんで、其上へ何の區別も順序もなく、階段組立用の角材を重ね置き、其中の一番大

大きな角を拾へと次郎に命じた。すると早速間違ひなく、一番大きな奴を選び出して来た。それを傍のテーブルの上へ置かせて、更に又、絨氈の上に残る角材中の、一番大きなのを選び出させた。斯の如く其度毎に一番大きなのを選び出させては、順々にテーブルの上へ並べさせて見たら、爰に始めて合點が行つたやうであつた。一番大きなものを取つた残りから、又更に一番大きなものを取れば、自然と大小の順序がつく譯で、さて斯う合點が往くと、次郎さん面白くて堪らない。成程階段と云ふものは、一段宛行儀よく高低のあるものだと勘付き、同時に「廣い階段」も、「長階段」も、「塔」も、一々材料を區別して別々に作るべきものであると覺つて来た。聽て先生の指南を受けずに、自分の手で自由に組立が出来るやうになつた時の次郎の嬉しさは格別

で、彼は拵へ上げてはコッし、コッしては組立て、凡そ一時間程は餘念もななく階段の遊びに夢中であつた。

◎指尖で物を見る稽古

次郎の御稽古も段々と進歩して、最早、單純な「塔」や「階段」ぐらゐでは満足が出来ぬ。既に物の大小長短、厚薄等は極めて樂に解るやうになり、進んで今度は五官の働き、殊に觸覺の作用を存分に發達せしむる、一層面倒なお稽古に取りかゝつても差支ない程になつた。

モンテソリ女史は、曾て低能兒の面倒を見て居た當時、圖らずも七歳以下の子供等が、指尖の極めて鋭敏であること、即ち觸覺の微妙なる働きの示し

て居るのに気がついた。それが七歳を超すと不思議にも少しく鈍くなつて来て、甚だ仕込み悪くなるやうに思はれた。爰に於て女史は、七歳以下の子供に對しては、既に記したやうに、御手洗を以て觸覺練習の手解とした。觸覺の發達を促す練習は、物體の表面を指尖で撫で廻はすより外に方法がない。隨て兩手と指尖は彌が上にも綺麗に洗ひ清めさせねばならぬ。就ては第一に洗面盥に湯を入れて子供に石鹼を使はせ、更に冷水を入れた他の盥で是を漱がせるやうにした。次で前にも一通り述べた、例のザラ／＼とスベ／＼の區別練習を行はせる。次郎も無論此御稽古をして貰ひ、一歩進んでは、反物の地質を指尖で鑑別する實習をも授かつた。

◎反物の地質を目隠して言ひ當てる

女史の工風した觸覺練習用器中には、却々實用に適つた面白いのがある。布地を澤山に集めて、是を別々の抽出に入れた小箱も其一である。抽出の中には、一種類の角布を二枚宛入れてある。天鷲絨が二枚、絹布類が各種毎に二枚宛、毛織物も亦た種類に應じて何れも二枚づつ、其外木綿物、麻等、有ゆる布地を一種につき二枚づつ入れてある。手觸りに依つて地質を覚え込ませるには、最初比較の著しいものから始める。次郎の始めて教はつた時は、天鷲絨と絹との角布で、此二枚の布地を次郎の目前に並べ、一ツ／＼指尖で撫でさせる。充分指尖が慣れて来て、双方の差別がつくと、今度は机の上に

山ほど積んである布地の中から、同一のものを二枚選り出させる。固より子供には、始めから布地の名稱を教ふことをせず、銘々單に手觸りを頼りに、拾ひ出すことになつて居る。次郎は瞬く間に、右の小箱中にあつた一切の布地を、指尖で鑑別するやうになつた。次郎ばかりではない、大多數の子供等も是丈は容易に出来る。殊に又、子供等は何れも此遊びを兼ねた實習を好む傾向がある。それ故、愈々目隠をした儘、絹と天鵝絨と木綿物との差別がつかへる程に指尖が利いてくると、其子は慥かに多勢の美望の標的となる。時稀、女史の新教育法を實施する『子供の家』へ婦人の參觀者などある場合には、往々子供等の中で、ソット其參觀者の傍へ進み寄り、手觸りで着衣の地質を知らうとして居るのがある。此お稽古が充分出来てから、各種の布地の名稱

を子供等に教へる順序となる。彼等は皆、絹、木綿、フーラル絹、麻、リンネル等が無難作に手觸りで言ひ當てる。普通の子は目隠をされると、却つて大喜びで、彼の低能兒の如く、目を隠されたが最後、手も足も出ぬやうなことは決してない。寧ろ目かくしを施した方が、氣を一時に集注することが出来て、稽古が樂になる。

◎重い軽いの區別

子供等の喜ぶ觸覺實習器中には、物質の輕重を手加減で知る練習器もある。是は木質の變つた四通りの木札を用ゐ、各一々五分宛順々に目方の相異をつけて置く。先生に呼ばれた次郎は、始め右の手に一番軽い札と、左の手に一

番重札を持たせられる。手の掌へ載せて見れば、重い軽いの見當が直ちに
つく。斯うして四種類の札の目方を一と通り良く呑込ませた上、更に目かく
しをあてがはれた。先生は目かくしをした次郎に向ひ、札の上から手當り次
第木札を手に取つて、重いか軽いか試めして下さいと云ふ。次郎は氣味悪さ
うに手を延ばして、右に一本左に一本、木札を取つて、頻りに目方を量つて
は、札の一方に重い札を積み重ね、片方に軽いのを積んで居た。時には重い
札ばかりを両手に握ることもあり、又軽いものゝみの時もある。何分四種類
とも僅かに一匁五分宛の相異であるから、大人ですら容易には區別がつかぬ。
それを次郎は手觸り加減で、巧みに選り分けて居た。

漸く三四歳から五六歳までの子供に、物によつては大人も及ばぬ智慧をつ

ける此新教育法には、随分、意外と思はるゝやうな單純な實習がある。茲に
記した物質の輕重を判別する稽古に次では、既に精しく記した木盆へ種々の
型を拔差する實習を行ふ。此處まで來ると、着々と練習された子供の觸覺は、
各種の形狀と其輪廓を稍識別するやうになり、今一足で文字も自由に書ける
處に達したのである。

◎手習の手ほどき

同一の事を繰返すやうであるが、今一應モンテソリ女史の發見した、手習
の手解に就て語らして貰ひたい。始め女史は、自分の手に預かつた低能兒に
手習を覚え込ませやうとして、ペンの使ひ方が一番邪魔になつたことを發見

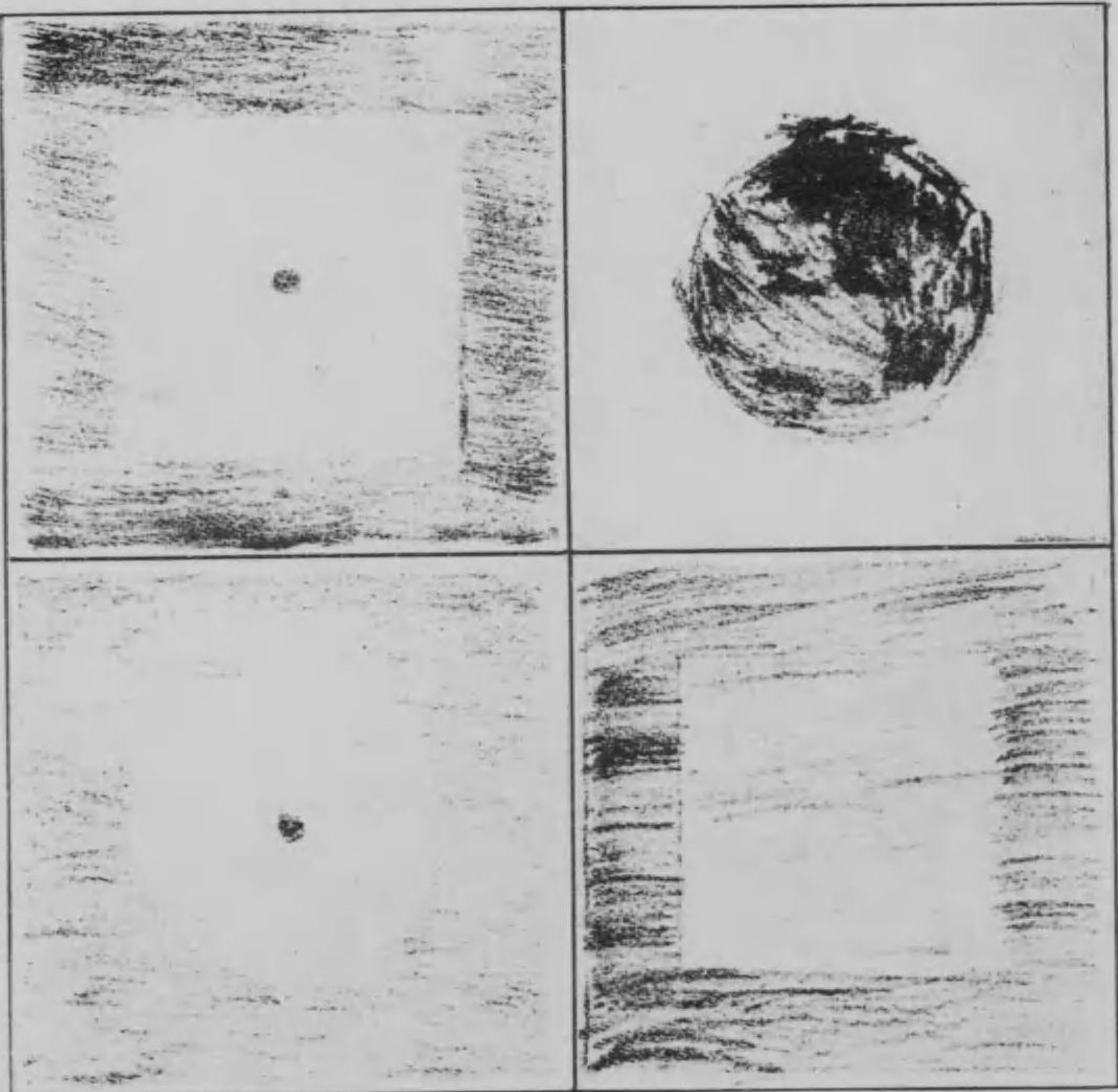
した。成程、性來の白痴でも、流石に指尖で文字の上を撫でさせれば、聽て差別のつく程に文字を覚えはするが、扱て是を一字づゝ誤らずに書くことになると、却々出來さうも無い。それといふのも畢竟、ペン若くば鉛筆を自由自在に使ひ得る程に、手先の筋肉が慣らされて居ないからである。そこで女史は、是等の低能兒のため、殊更に文字を板へ彫りつけ、其の上を小さな箸で抹らせて見た。是で漸く運筆の加減も幾分か呑込ませ得るに至つたが、何分普通の兒童に、眞逆低能兒向きの方法を適用するやうな廻りくどいことは出來ぬ。其處で研究に研究を重ねて、終に一の方法を發明した。即ち色鉛筆を以て、三角、角、圓等幾何學的形狀の輪廓を寫させ、更に其内部を色で塗り潰させることにした。是等の三角、四角、圓、楕圓形などは、豫め悉く

鉛板又は他の金屬で造り置き、子供等は紙の上に右の金屬製の型を載せて、其輪廓を辿りつゝ寫すのである。輪廓は出來上つたが、其内部は白地の儘なので、これを塗り潰しさへすれば、自然に運筆の具合が分つて來る。無論此實習には、必ずしも金屬製の幾何模様のみを用ふるに及ばない、既に記した木盆を利用して内部から輪廓を寫させても、旨意は同一である。

御參考までに、次郎さんの御稽古振りを寫眞に依て御目にかけてやう。左りの上の日の丸は、随分勢よく塗り立てたものだが、チト不充分な處もある。それにしても輪廓外へ筆の飛出ぬ丈は旨いものだが、何分萬遍なく日の丸を塗り潰してないのが疵で、未だ手先の良く利かぬ證據だ。右の上の四角な分になると、大に山氣を見せて居る。一と通り内部を薄く塗り潰して、更に濃

い墨色で外側を塗つて居る。濃淡の使ひ分けも良く、運筆が天地一方になつて居るのも尙更に結構だ。左り下の分になると見違へるやうに巧みなものだ。小手先がチャント定まつて、中央の角型の真中に真鍮紙の頭までポツンと記してある。右下の丸型に至つては、儘に運筆が意の儘になつた證據だ。筆持つ手の如何にも軽々と樂に見ゆる様子など、未だ四歳に達せぬ次郎さんの作としては、誠に驚くべき出来である。此處まで發達すれば、別に先生の指南を受けずとも、文字は書ける筈だ。

次郎は全く女史の御蔭で、吾知らず手習の一番六ヶしい難所を通り越したのであつた。正確に手本通り書かうとする考と、手先の筋肉の働とが一致するやうになり、最早運筆は天地左右、濃淡厚薄、如何様にも思ひの儘となつ



(照參頁三〇一)。た來てつなに者達々段が事運の供子

た。

◎ 鑄紙製の文字

同時に次郎は、鑄紙の切抜文字で、ABCをスツカリ學んで了つた。
先生の切抜文字を用ゐて文字を教へる具合は、既に精しく記しては置いたが、事の序にチョット茲に述べる。兎に角、最初OなりIなり、教へやうとする文字を拾ひ出して來る。切抜文字はハツキリとした大きな字體で、ザラザラした鑄紙を切抜いてボールの臺紙へ貼附けたものだ。先生はOの字の臺紙を子供に渡しながら、明快な口調で「O、O」と發音する。次で文字の上を恰度手習をするやうに字格筆法通り、子供の手を取つて其指尖で撫でさせ、

同時に常人にもオー、オーと發音させる。萬事此調子で二十六文字を教へ込む。左れば一端此方法に由つて、AからZまで心得て了ふと、文字を耳にするだけで、子供等の手は吾知らず文字の形通りに動く。隨て其手に白墨を持つて居れば、それが自然に黑板なり床板なりへ實現する道理である。

◎智慧の突發

子供等が自然に文字を書き得るに至つた筋道は、大略前に述べた通りであるが、今是を摘記すれば凡そ左の順序となる。

(一) スペ〜とザラ〜の紙、及び布地等を用ゐて、指尖の觸覺、即ち手觸りの巧者加減を發達させる。

(二) 木製分銅の利用により、物體の輕重を分量で稍正確に感得させる。

(三) 木盆に、角、三角、圓、楕圓等、各種の幾何模様を抜き差しさせて物體の形狀に慣れしめ、斯くして大に觸覺の發達を促がす。

(四) 輪廓のみの幾何模様(角、三角、圓等を指す)の内部を塗り潰させて、運筆の調子に慣れさせす。モンテゾリ女史は此方法を以て、舊式の手習草紙十數頁の使用に勝ること萬々であると言明した。

(五) 鑄紙製の切抜文字を用ゐて文字の形狀と發音に通せしむ。

伊太利語は英語と異なり、ハツキリと發音すれば、容易に綴字が解る。何となれば、伊太利語の母音も子音も殆んど其發音に變化がないからである。英語にはサイレントもあり、且つ又想像のつかぬ不規則がスベルにも發音に

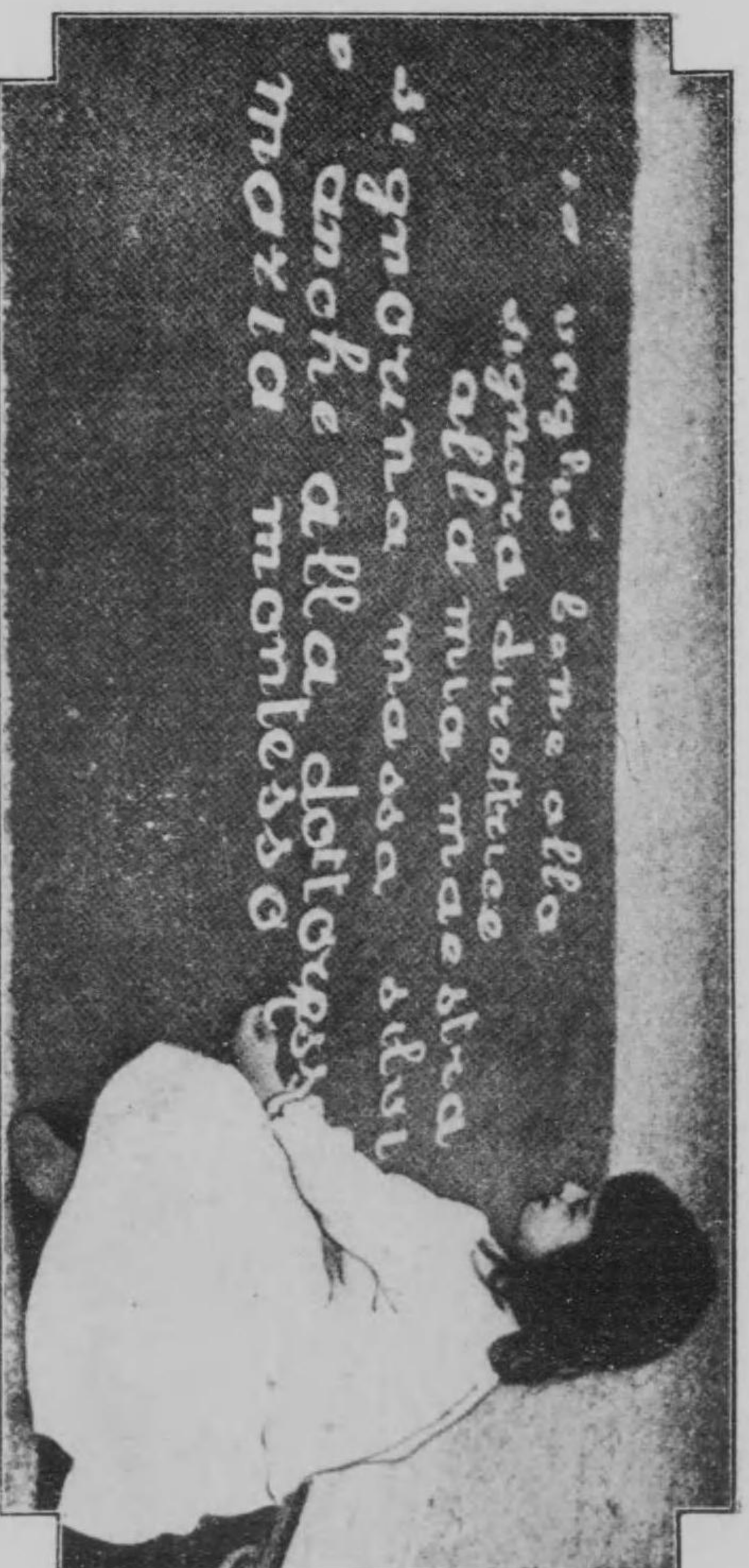
も絡はつて居る。然し伊太利語なり、英語なり、何れにしても、實驗者の明言する處に由ると、モンテソリ法さへ應用すれば、子供等は少しの困難もなく、自由自在に文字を書けるやうになるといふことだ。是等は畢竟「智慧の突發」とも又「習字能力の迷出」とも云ふべきであらうと思ふ。即ち種々の方面から或程度まで子供等の智慧を開發すると、自然に蓄へられた能力が、突然爆發して文字が獨り手に書ける譯になるのだ。

◎赤文字青文字の文句

次郎は一通り鑢紙の切抜文字を吞込んで了つたので、今度は女史の謂ゆる「組合せ自由文字」を使へることになつた。此文字は残らず厚紙を切抜い



→教に供字を方を用の字文き抜明たて作で紙鑢こり類は史女リソソモ
(照參頁八〇一)なる居て推り通注字を字文で指の本こは供字。なる居て



(照參頁八〇一)。るくつ草文(お用な字文)投紙

て造り、母音は悉く赤文字とし、子音は皆な青紙で切抜いてある。固より文字の数は充分に用意して、是を活字のケース然たる、仕切のついた箱に收容して置く。又各仕切毎に一々案内の文字を貼りつけて、實習後元へ戻すに都合好く出来て居る。總てモンテゾリ式の學校では、一切の實習用器類を、子供等の手で出し入れさせる規程になつて居り、出し放しの儘では實習の結びがつかぬものとしてあるので、此點は實に良く吞込ませてある。斯うして始めて秩序が保たれるので、其教育的價値の大なる寧ろ意外である。

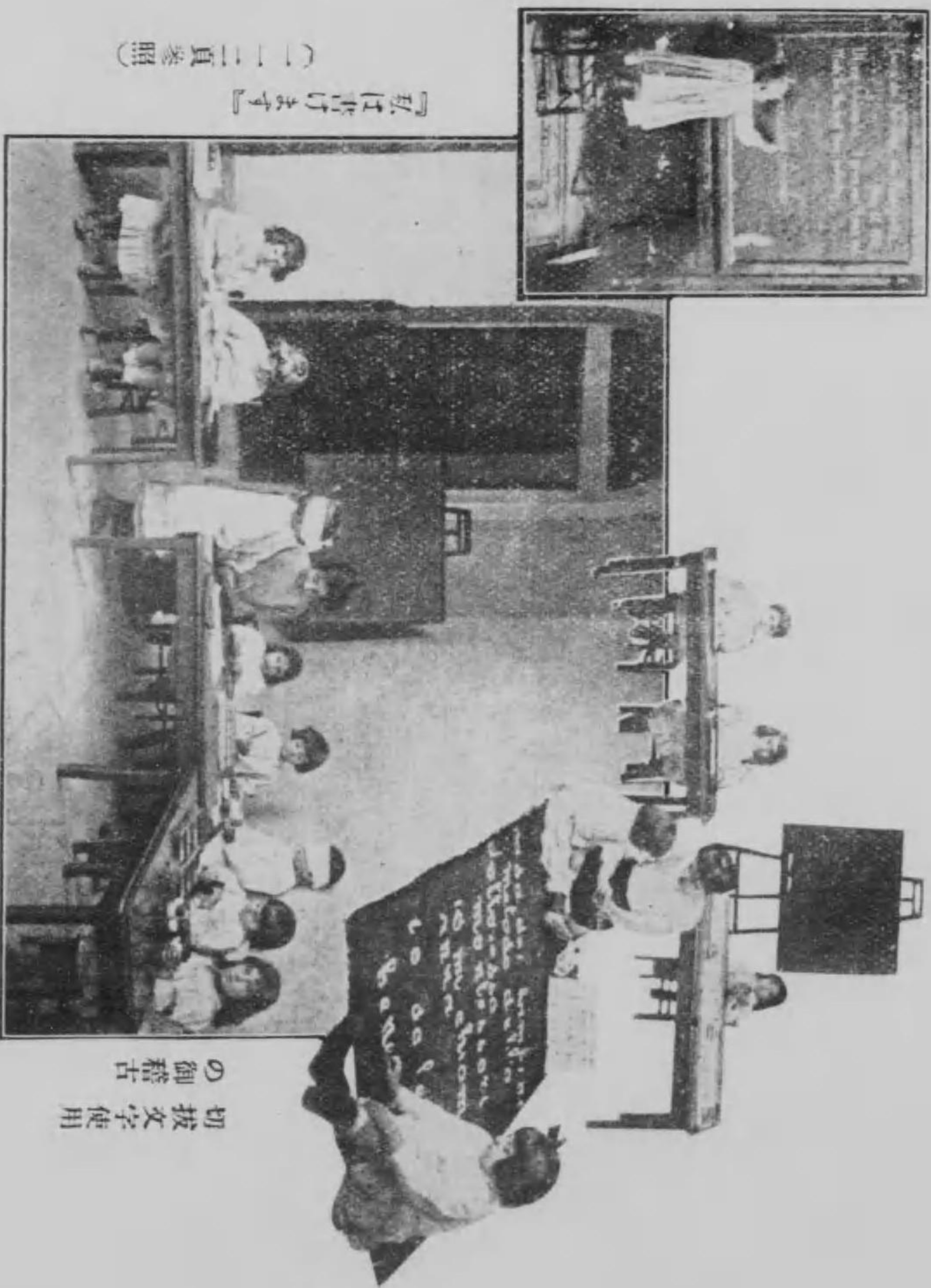
女史は曾て其講演中、此組合せ文字の應用に就て、實に左の如く言はれた。
『子供等が豫め鑄紙の切抜文字を良く覚え込めば、今更組合せ文字の使ひ分に迷ふ筈は無い。鑄紙で單語を綴り得る以上、組合せ文字を使ふて同

一のことを繰返すに、何等の不便を感じる理由はない。唯一の相異なる點は、組合せ文字を用ゐる場合に限り、觸覺に頼らず、一目直ちに文字を了解することである。故に單語なり、短文なり、容易に綴り得る筈である。要するに觸覺、即ち手觸りに依つて鑢紙の切抜文字を征服し得た經驗を、更に組合せ文字に應用する迄の事である。左れど斯の如き組合せ文字に由る作文の實習に際し、果して子供がそれを讀んで居るものか書いて居るものか、此二者を判別することは困難である。一方、子供は文字を透き寫しにせず、而も單語を容易に綴つて居る。そして此綴るといふ事實は、文字書く術と最も必要の交渉ある附屬的の一課程である。又作文が出来れば必ず文字は讀み得るに相異なる、然し私には、組合

せ文字に由る實習が、寧ろ讀むことよりも、一層書く側に接近して居るやうに思はれる。何故かといふに、子供は切抜文字を綴り合せて、單語なり短文なりを作つて居るからである。それにしても正確に是を判斷することは困難で、畢竟、讀むこと及び書くことの兩者を、同時に兼ねて居ると見ても差支はあるまい。』

斯の如き次第で、子供は鑢紙と青赤の組合せ文字の御蔭で、子供自身にも傍觀者にも突然過ぎると思はれる程の急速度を以て、文字を書き得るやうになる。實際モンテソリ式の教育を受けて居る子供等は、文字書くことを、自然の發達だ、恰も年頃になつて口が利き歩行が出来ると同一だと思つて居るらしい。漸く三歳半の子供等が、頻りに他の子供等の稽古を見真似して一生

懸命(けんめい)實習(じつしゆ)に精(せい)を出(だ)す始末(しまつ)であるから、四歳(よっさい)に達(たつ)する頃(ころ)には、一人(ひとり)残(のこ)らず自由(じゆう)自在(じざい)に書(か)き得(う)るのも無理(むり)はない。僅(わずか)かに廿日(かかん)間の實習(じつしゆ)をしたのみで、廿六(にじゅうろく)文字(もじ)を悉(ことごとく)書(か)いた子供(こども)もある。通例(つうれい)一ヶ月(げつ)若(も)くば六週(しゅう)間(かん)を要(えう)すれば、誰(た)れ指揮(しき)するとなし、教室(けうしつ)内の黑板(こくばん)へ、獨(ひと)りでに美事(みこと)な文字(もじ)を書(か)くやうになる。謂(い)はば體内(たいない)に籠(こも)る智慧(ちゑ)が、自發(じはつ)的に逃(へい)しゆつして、黑板(こくばん)の文字(もじ)となつたものである。兎(と)に角(かく)單語(たんご)及び短文(たんぶん)を、切拔(きりぬき)文字(もじ)や組合(くみあ)せ文字(もじ)を一字(いち)一字(いち)用(もち)ひて綴(つづ)るやうになれば、讀(よ)むことの下準備(したじゆんび)とはなるけれど、然(しか)し突然(とつぜん)目前(めくまへ)へ單語(たんご)を突(つ)きつけられた時(とき)に、直(す)ぐ様(さま)其(その)意味(いみ)を解(かい)せなくては、まだ立派(りつぱ)に讀(よ)めると銘(めい)を打(う)つ譯(わけ)には行(い)かぬ。



切拔文字使用の御様子

々様の習練發聲写真五

(一一二頁参照)

『私は書きます』

○いよく讀めて来た

モンテヅリ教育法に由る讀方の稽古は、左の方法を以て手解きとして居る。子供等が日常目慣れて居る事物の名稱を、教室内の黒板、又は特に其目的に充てた、カードに書いて置く。先生は此カードを子供等に示し、それに書いてある文字の發音を試みます。無事にその發音が出来ると、今度は先生が『早く』と子供に命ずる。子供は此二度目の發音を命令通り口早に行る、然し文字の意味は解せぬ場合が多い。續いて先生は『モット早く、モット早く』と急ぎ立てる。子供は之に應じ何遍でも繰返して發音し、漸く其意味を臆氣ながら勘付いて来る。

いよく讀めて来た

此實習に由り、子供等は追々と文字の意味を呑込み、畢竟文字は發音の連續したものでなく、思想の表示であるといふ點に目をつける。故に文字を一瞥して直ちに其意味が會得され、斯くして子供等は早くから文字の組織に通じて來る。女史は書いた文字の意味を直覺的に了解する子供等の能力を發達させやうとして、最初は玩具と遊びに事寄せて一の工風をして見たが、子供等の文字を覚え込まうとする好奇心と熱望とは頗る激烈で、玩具も遊びも刺戟物としては全く不必要のものとなり了つた。そして結局、女史は文字を認められた紙片を澤山に入れた籠を、教室内至る處に備へおく事を以て、充分目的に叶つたものとするに至つた。何時見ても是等の文字籠の周圍には子供の山を築き、熱心な子供は、籠の底まで残らず讀み了り、更に隣りの籠に移る程である。

である。

◎印刷した文字

印刷した文字を子供等に讀ませうとして、女史は印刷、肉筆兩様のカードを用意したことがあつた。然るに子供等の方で其無用なるを指摘した。成程室内を見ると、壁には印刷した大きな曆が掛かつて居る。子供等は、文字讀むことに熱心の餘り、女史の氣づかぬ間に此曆の傍に集まつて、何の世話もなく既に残らず印刷した文字を讀んで了つたのだ。

焦つて功名を得やうとする先生連や、保護者等は、子供等の此の熱心な様子を見て、忽ち一足飛びに書物を讀ませたら如何のものだらうと云つたが、

女史は随分と嚴密な試験を何回も行なつた結果、書物を讀ませることだけは實行せぬに決した。成程、ドノ子供でも樂に文字を讀みはするが、文字の意味に至つては皆目解らない。意味を解せぬ文字は、讀ませても何の役に立たぬ、そこで一と先づ此事は思ひ切ることにしたのである。

すると或日の事、突如として驚くべき現象が女史の眼前に現はれた。

その日は恰度種々の實習も済み、子供等は例に依り一同銘々の好きな御話に耽つて居た。頃は長閑な春の日和で、何れも校内の庭に多くの時間を費やして居たのであるから、御話も自然庭の春景色に花を咲かして居た。聽て三四人の子供は突と座を立つて黒板に近寄り、次の文章を白墨で書き現はした。

『學校の御庭に御花が咲き始めて何といふ嬉しいこととせう。』

是を見た女史は尠なからず驚いた。別に教へもせぬのに、判然と意味を現はした文章を書くなどは、無論豫期して居なかつたのだ。嘗て子供等が始めて單語を書いた時も、是と稱々同一の調子に、能力が迸り出たのである。そこで女史は、正しく短句の讀方に持て來いの時期が到達したと心得、直ちに立つて黒板へ左の通り認めた。

『皆さんは先生がお好きですか。』

子供等は暫らく是を見詰めて思案しながら讀んで居たが、其中に一同嬉しげに大聲あげて『ハイ、ハイ、大好きです』と叫んだ。女史は更に、『では皆さん御部屋の中で靜かに致しませう』と記した。これだけの文句を、書きも終らぬ間に、室内はシーンと靜まり、唯僅かに椅子の位置を更へる音が耳に

入るのみであつた。引續き女史と子供等の間には、黒板を仲立として筆談が始まつた。其中に、一同書いた文句の有難味、即ち、「書いた文字は思想を運ぶ」といふ一事を泌々と了解した様子であつた。女史は此機會を利用して諸種の命令を紙片に認め、一々待兼ねた子供等に手渡すると、何れも讀み終るが否や、嬉々として用を果たすのであつた。

◎子供に空想は禁物

モンテゾリ女史の言ふ處に依ると、永年、多勢の普通兒童に其の獨得の新教育法を施した結果、どうも六歳以下の子供に續けて長く讀み書きをさせるのは宜しく無いやうであるさうな。何んぞ格別に無理をして氣を惹つけたら

別の事、左もなくば纏まつたものを長く讀ませたり、書かせたりするのは、子供の自然に逆ふ恐れがあるといふのだ。口を利かずに、外の方法で思ふ仔細を一言ひ現はすことが出来ると感附いた子供等は、何れも當分それのみに氣を奪はれ、唯モウ其稽古に餘念もない有様である。若しも長い御伽噺のやうなものを聲高に讀んで聞かせると、多くは氣が外へ散つて了ふ。そして銘々の小さな胸に思ふて居る何ものかを、やさしい單語なり文句なりで、書いたり讀んだりするのが何よりも楽しいやうに見受ける。言ひ換へれば、讀み書きは、銘々の日常の一切を言ひ現はすに都合が良いから受がいくので、夢のやうな空想を畫く手引とはならぬのである。

女史は、成るべく子供に空想を抱かせぬ事を念じて居る。他愛もない事に、

夫から夫へと小さな頭を苦しめ悩ますのは、甚だ宜しくない上に、物の呑込みが困難になつて来る。空想に耽つたり、卑近の事物を篤く教はらずに居ると、子供等は輒もすると途方も無い感違ひをする恐れがある。女史は、教育家として、是等の不都合を除く道を講せんために、格別の苦勞をしたものである。

女史の生國伊太利では、御用聞の來るのを待たずに、日々の小買物を表の市で整ふる風がある。八百屋魚屋何んでも御座れ、往來に屋臺店を出して客を待つて居る。自然『子供の家』に通ふ子供等は、何れも皆、小買物に用ふる銅貨と御馴染である。これへ目をつけた女史は、早速、算數の御稽古に銅貨を利用することにした。是は必ずしも實際の銅貨に限つた譯でなく、ポー

ル紙を丸く切つて用ふるも結構である。斯うして子供等は、一二三を十まで算へながら、銅貨の價値をも併せて覚え込んで了ふ。

◎算術の手解き

算術を仕込むには、前に記した『長階段』の件で御馴染の角定規一束を、教授用器具に充てる。定規の數は十本で、一番短かいのが一區切、一番長いのが十區切と、それ／＼赤青のダンダラに染分けられてある。先生は、適當な潮時を見計らつて、稽古に着手する。先づ次郎が、十本の角定規で『長階段』を首尾克く作り果せたなら、一番短かいのを指して、『一』と教へる。次に、赤と青に染分けた二番目の定規を指して、『一、二』とダンダラを頼りに二の

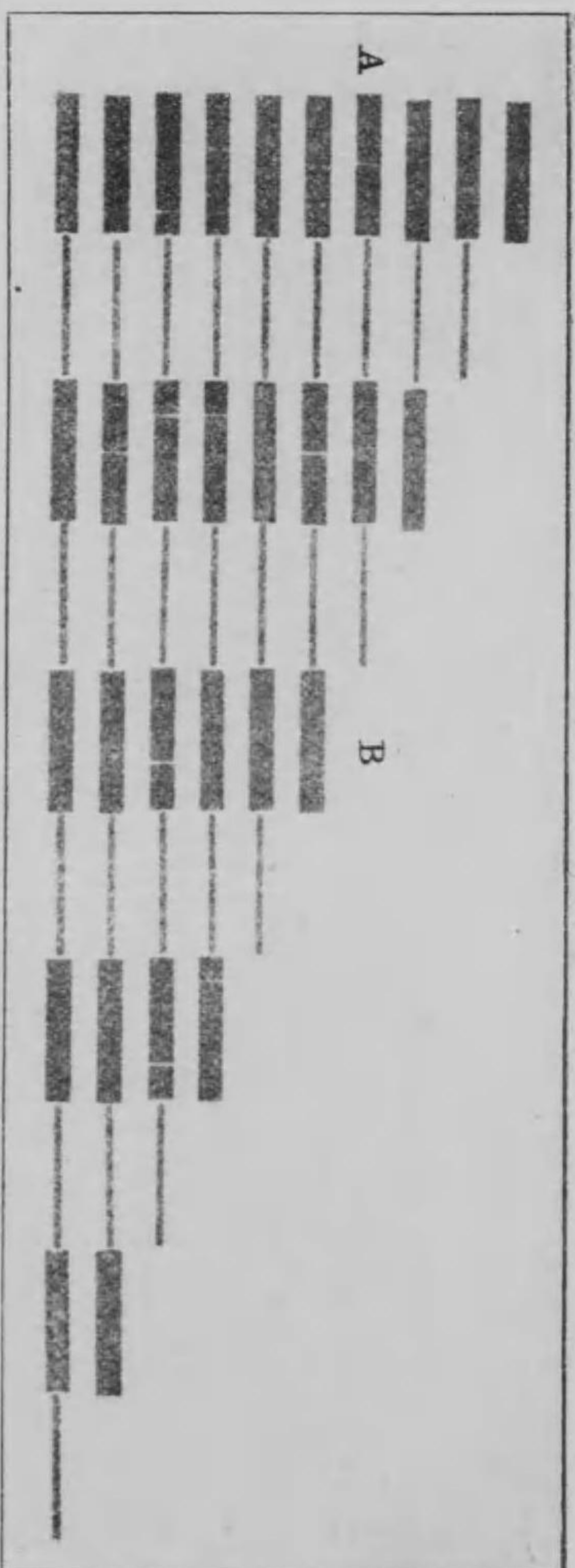
数を教へる。その次は「一、二、三」と云ふ具合に、一から順々に算へて三に達する。数字は、總て一へ戻つて順々に読み上げ、決して突然に七とか、九とか教へるのではない。是が一と通り済んだなら、今度は次郎さんの方で算へ上げる番になる。クリノと肥つた指先で、ダンダラを頼りに、一二三と讀上げて居る様子は、實に無類である。子供自身も亦た、是の御稽古が甚だ氣に入つて居るに相違ない。といふのは、一應十本の定規を上から順々に算へきつて了ふと、更に今度は誰に教はると無く、横に定規の数を算へ始める。謂ゆる自發的の意味も、此邊を見れば大に思ひ當るのである。

斯ういふ風にして、縦横に數の勘定が出来ると、終には手觸りのみで、定規の長さを言ひ當てる。元々觸覺が發達して居るから、他所の子供よりも

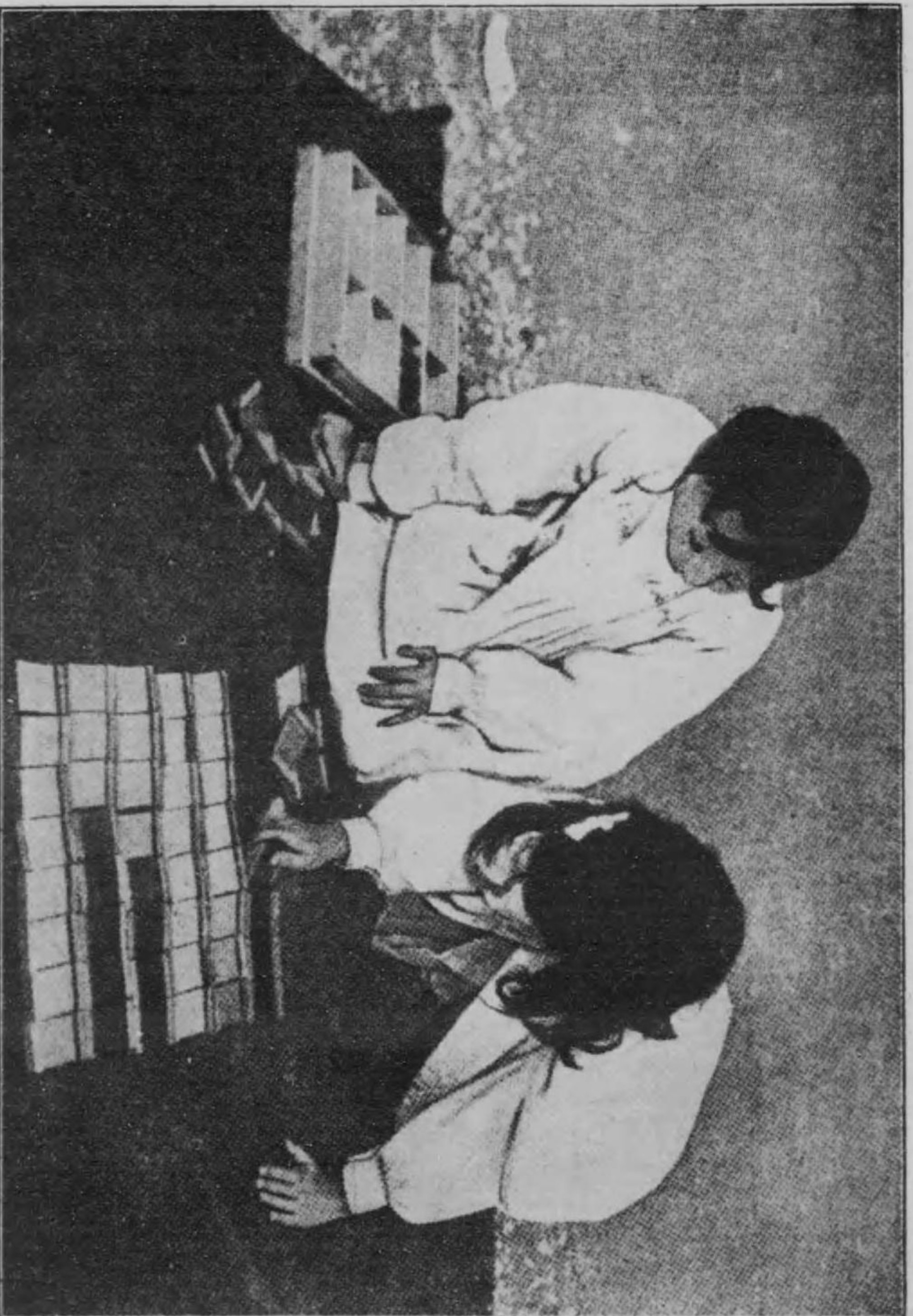
呑込みが早い。總て、先生は十本の定規を交せ混ぜにして置いて、其中から三番目の定規を手に取り、次郎に向つて「この次ぎの長いのを下さい」と云ふ。これは長短の釣合を良く覺らせる爲めで、得心の行くまで稽古を續ける。是が済むと、一々定規の番號を呼んでは、子供に夫を拾はせる。若しや子供が文字を書けるならば、この御稽古に際して、例の鑢紙のくりぬき文字を利用する。先生は、入れ亂れた儘の定規を指して「次郎さん、二番の定規を下さい」と云ふ。次郎が間違はずに二番の定規を拾ひ出したなら、2と云ふ數字をくりぬいた鑢紙を見せて、「之は二です」と2の形を教へ、例の通り指先で之を撫でさせる。此稽古は、必ずセゲンの三段法に依る譯であるが、それは、第一に先生が子供に物を見せて其名稱をハッキリと教へ、第二に其名稱

を呼んで子供に夫を拾はせ、第三に物を指して其名稱を子供に問ふと云ふ三段詰の順序である。

いよいよ此の順序で一から十まで呑込んだ上は、更めて例の『長階段』を並べさせ、組合せた十本の定規へ一本毎に、鑄紙の數字を立てかけておく。子供等を相手に、加減乗除の手解をした人は、身に覚えのある筈であらうが、此の十本の定規を利用して算術の稽古に面白味を持たせる事の利益は、一目瞭然である。假令ば、加算の場合には、九番の定規の上に一番の定規を載せて十の數を出し、更に八番と二番、七番と三番、六番と四番、それら異なつたものを組合はせて、均しく十に達するといふことを會得させる。跡に残つた五番の定規は、先生が是を手に取つて、十番の定規と並べ、右より



○るすなき解手の算算で用川な規定角の本十此。標模圖の「段階長」



あか湯の種入に色入。る居てへ並を巻糸てじ懸に紙の別色は葎虎子
ふ了でん私春にすは違間を色たつ異のり道四十六合都てつ

左へブン廻はして見せると、五が二つで十になることが解る。

この手解から、追々と初等数学に入門する譯であるが、要するに、少しも頭腦を苦しむることなしに、如何に容易く此の六ヶしい學問をこなし得るか、是に依つて幾分窺ひ知る事が出来やうと思ふ。

◎三歳の子供良く色の區別を呑込む

女史が、三四歳の子供に、始めて色の區別を教ふる時の器具は、見別けの容易なハツキリとした色の絹絲を、平たい糸巻に巻つけて用ひる。但し一色につき二個づつ糸巻を用意しておく。是も無論、前に記したセゲンの三段法を借用して教へ込むのだが、今其實際の模様を次に記す。

先生は次郎の目の前へ黄いろい糸巻を示し『黄色』と發音しながら、二個の糸巻の内一つを下に置く。色がハッキリして居るから、次郎は夫を見てニコニコして居る。『是が黄色ですよ』と附加へても宜しい。色の名稱はキツバリと發音して、それに強く意味を持たせることが肝要である。

暫くして、次郎の目が充分に黄色を吸取つたナと感附いてから、先生は更に赤い糸巻を下に置き『これは赤、赤、赤です』と告げる。子供等もコンナ色は、業に已に再々見て居るのだが、チャント纏まつて意味ありげに、頭の中へ這入つたのは、今日が始めてである。其處で、彼等は今更の如く、此二色を見詰めて居る。良く良く意味を持たせて吞込ませるのが主旨であるから、決して急いではならぬ。子供によると、吞込みの極めて遅いのである。殊に

斯ういふ日頃見つけて居る赤や黄色を、何となく勿體らしく見聞するのは、今日が皮切りで、當人にして見ると却々の重大事件であるから、決して鵜呑にさせてはならぬ。篤と合點が行けば、子供は必ず目にもものを言はせて先生の顔を見上げる。

此所まで来たなら、始めて第二段に取りかゝる。これは、果して子供が黄色と赤の相異及び色の名稱を吞込んだか、どうかを知るためである。謂ゆる精確の程度を試めすのである。

先生は子供に向つて『先生に黄色を下さい』と注文し、次いで又『先生に赤を下さい』と言ふ。子供の視覚、即ち目に故障がなければ、十中八九、斯るハッキリした色合を間違ふことがない。無事に之が済んだなら、教授の第三

段に達する順席となる。即ち、先生は黄色を指し『この色はナンですか』と聞き、次郎の答が満足に済めば、三段教授も結末となるのである。

引續いて同じ糸巻を今一組用意して、遊びに事寄せ、此の稽古の仕上げをする。先生は最初糸巻二個を行儀よく下へ並べて、『御覽なさい、二つとも同じ色の赤ですよ』と言つて聞かせる。それから青、赤、緑、紫等をも、同じ様に並べて、子供の目に物の對と云ふことが呑込めたなら、今二列に並べた糸巻を残らず交せ混せにして、『其中の赤を指し、之と同じのを下さい』と註文する。子供が無事に赤いのを拾ひ出したなら、矢張、先生の行つた通り同じものを二列に並べさせる。斯うなると、子供は銘々の智慧を働かせて、次から次へと二列に並べる。之を餘念なく繰返して居る内に、六十四通りの

異つた色を悉く會得して了ふ。ウルサキ干渉を全く避けて、子供等に自然の啓發を促がすが、三段法の秘訣とする所である。

◎子供の嗜好を尊重せよ

今記した三段教授の途中で、萬一子供が倦へたとしても、決して無理に強ひる事は宜しくない。目が悪かつたり、教はる時に氣が充分乗つて居なかつたり、若しくは歳の餘り小さいため無頓着であつたりして、ツイ色の差別が呑込めなかつたのであらう。斯ういふ場合には、先生も成るべく愛想を良くして、イヤなものは決してさせぬといふ態度を見せ、子供を放してやる。子供は先生の許を去つて、銘々の好きな遊びに加はるのである。モンテソリ女

史は、此點に關する意見を左の如く其著書に述べて居る。

『子供が此稽古に身を入れさうもない時には、教師の方で一と先づ夫を中止すべし。是は、後日同じ稽古を續ける時に際して、何等の蟠りもなく、全く新規の感じを與ふるためなり。此稽古で酷い目に會つたなどと思ひ出させるやうでは、仕事が困難になり、如何様にも施す術が無くなる場合無しとせず。心すべきことなり。』

子供が心から先生の相手となつて、應對に面白味を感じぬ限り、如何に心を盡して教へ込まうとしても、結局は骨折損である。之に反して、若し子供の方に充分の氣乗りがあれば、その自然の好奇心の御蔭で、先生の有り難い千萬言にも増した刺戟を受け、驚く程に智慧がつくのである。子供の中には、

理解力の著しく發達したのもあり、又、緩々と手引せねば、何事も合點の出來ぬ質もある。此邊の關係は別して注意すべき必要がある。

由來、心の性根を全く入れ替へることは不可能である。此の稽古を見ても領かるゝ次第であるが、百人が百人共凡て同じ程度に應對はして居らぬ。物を見て意味を覺ると直様外へ氣を移すのがあると共に、一方には執念く何百遍も同一事を繰返して濃厚に物を樂しむ性質もある。モンテゾリ女史は、丁寧反覆、子供等の異なつた嗜好と性癖とを教へるものが能く心得置き、必ず之を大事にして其發達を促がし、嚴重に之が觀察を怠るなと教へて居る。『百合は決して薔薇とならず、如何なる教育を以てしても、人性を一變し心の色彩を更ふことは出來ぬものなり』との眞理は、子供を教ふるものに取り一

刻も忘るゝ能はざる處のものである。

モンテソリ女史は、元々、醫師の職業を選んだ程であるから、仁術の土臺とも云ふべき思ひやりに富んで居る。女史は不幸なる低能の兒童を手掛けて居る内に、フト其天才の刺戟に由り、普通兒童のため其の世の中を擴め、未だ固まらぬ小さな脳を勞つて、重荷の負擔を軽減すべき一の方法を發見したのである。學びの園に始めて入つた時から、好奇に驅らるゝ子供の威嚴をば、呉々も尊重し、決してその自發を妨ぐることを勿れといふのが、此偉大なる女史の偉大なる教則である。學びの園に咲き亂るゝ草や花木に、子供を伴れ導くことは差支へないが、能く之を究め、理解し、且つ培養せんとする草木其物の選定は、宜しく子供自身の爲すが儘に任せ置くべきである。(終り)

大正四年四月十九日印刷

大正四年四月廿七日發行

【定價金五十錢】

著者 池田藤四郎

發行者 野依秀一
東京市麴町區有樂町一丁目四番地

印刷者 荻原勝次郎
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

不許
複製

發行所

東京市麴町區有樂町一丁目四番地
電話本局四五・四五一六番
振替貯金口座 東京三四三三番

實業之世界社

實業之世界社發行圖書總目錄

の 中 類 書 叢

新 知 識 叢 書

▲毎月二冊以上発行 ▲定價金二十錢 ▲郵税金二錢

最近科學の急潮の如き發達を悉く知らんとするは容易な業ではない。而して悲しい哉、我が國では此の新知識吸収の便宜が甚だ少ない。我が社は之れを憂へ、廣汎なる野に於ける新知識の普及の目的を以つて、最低限度の價を附して、此の叢書を發賣することにした。世界の進歩を知るに、之れに優る要領を得たものは外にないと信ずる。

!! 威 權 高 最

- ▲第一編 物質非不滅論…(既刊)…大杉榮譯
- ▲第二編 獨逸工業の發達…(新刊)…永代靜雄譯
- ▲第三編 科學の根柢…(新刊)…小原慎三譯
- ▲第四編 婦人參政權運動…(新刊)…福永挽歌譯
- ▲第五編 飛行機の進歩…(新刊)…仲木貞一著
- ▲第六編 島國及び島國人…(新刊)…西村二郎譯
- ▲第七編 生命の起源…(近刊)…佐藤綠葉譯
- ▲第八編 社會改良と善種學…(近刊)…高島素之譯
- ▲第九編 實驗天才製造法…(近刊)…永代靜雄譯
- ▲第十編 最近科學の進歩…(近刊)…青柳有美譯
- ▲第十一編 疲勞の科學的療法…(近刊)…福永挽歌譯
- ▲第十二編 最近養雞學…(近刊)…中村孤月著

▲以上は四月中旬迄悉く發賣すべき見込みなり、尙ほ陸續種々の題目の下に世界の新知識を紹介す可く、目下諸家に依頼して夫々選定考究中也

明日の壇本文

□家名十八筆執□

◎夏目漱石◎北原白秋◎正宗白鳥◎昇曙夢◎大町桂月◎長田秀雄◎長田幹彦◎平田秀木◎青柳有美◎岡本綺堂◎鈴木三重吉◎岡田八千代◎小宮豊隆◎中澤臨川◎よさのひろし◎與謝野晶子◎蒲原有明◎高安月郊◎成瀬無極◎秋田雨雀◎和田垣謙三◎野口米次郎◎高須芳二◎野上白川◎野上彌生子◎前田暁◎若月紫蘭◎柴田勝衛◎戸張孤雁◎小野賢一郎◎栗原古城◎田中實太郎◎沼波瓊音◎佐藤春夫◎石井柏亭◎廣瀬哲士◎小川未明◎茅野蕭々◎長谷川天溪◎西村清山◎加能作次郎◎阿部幹三◎川合貞一◎内田魯庵◎野依秀一◎西本翠陰◎松居駿河町人◎上小劍◎仲田勝之助◎小山内薫◎中村星湖◎生方敏郎◎吉井勇◎中村古映◎相馬御風◎福永挽歌◎伊原青々園◎長谷川時雨◎安成二郎◎吉井勇◎中村古映◎太郎◎森田草平◎仲木貞一◎森下岩太郎◎奥川夢郎◎田中萃一郎◎中村古映◎堺利彦◎守田有秋◎らいてう◎長尾素枝◎田山花袋◎徳永保之助◎伊藤野枝◎徳田秋聲◎田村俊子◎浩々歌客◎眞山青果◎片上伸◎生田長江◎和氣律次郎◎安成真雄

永遠に傳ふべき近代文藝の名作集

現代文集

星一堂に集る

■菊判一千百三十頁 定價一圓九十錢 郵税十二錢■

曩に孤蝶馬場勝彌先生、東京市に衆議院議員立候補の名乗りを、漸く活潑沈滞爛熟を極めたる我が文壇は、之れに刺戟を得て、となり、賛成となり、援助となり、倏ちにして文壇諸家の同情成る、是れ實に文壇空前の美舉ならずんば非ず。

『現代文集』收むる所、小説あり、脚本あり、評論あり、研究あり、隨筆あり、詩歌あり、百花爛漫眞に再び得べからざる現代文藝の一大パノラマ也。

日本文壇空前の美舉

慶應義塾大學教授 馬場孤蝶先生 口譯

西洋頓智集

定價金三十五錢 郵稅金四錢

日本人はモット頓才を養へ

吾れに圓轉滑脱なる小さんあり、輕妙洒脱なる圓右あり。然れども吾人未だ高座の外に一の頓才家を有するなし。見渡す限り、之れ神經衰弱の顔、神經過敏の顔、ヒステリーの顔、憂鬱鎖沈の顔、何すれぞ夫れ然るや。吾人之れを憂へ、茲に西洋頓智の精髓を江湖に薦め、以つて少しく諸君に福徳圓滿の相を與へんとす。笑つて世を送らんとするものは本書を讀め。笑ひは果斷なり、勇氣なり、超越なり、優勝なり、然り而して最後に平和也。

惜哉シヤレの分らぬ男にて

▲早稻田大學教授 安部磯雄先生著

誰れを選びか

▲定價金廿五錢 ▲郵送料金 四錢

▲法律新聞主筆 安達元之助氏著

應用群眾心理

▲近刊 ▲四六判 ▲定價未定

這般の總選舉に際して、些の躊躇なく、善き代議士を得たりといひ得るもの果して幾人かある。不用意の中に貴き一票を投するが如きことあらば、後如何に臍を噬むも及ばず。眞に國家の福利を念とする選良を得んには、不斷の監視、不斷の顧慮、不斷の詮議なかる可らず。憲政の意義を知る者は、本書の暗示する所に聴く所あれ。

群眾心理に關する著書少なしとせず。されどこれが應用を説き、選舉、信教、議會、裁判等の實際問題に簡明なる解釋を與へたるものなし。幸にして本書は既刊群衆心理學書中の此の缺陷を補ひ得て餘りあり。敢て一本を薦む。

宇宙の神秘を闡く鑰

▲文學博士 三宅雄二郎先生著
▲實業之世界社編輯局長 青柳有美先生解説

縮刷 宇宙 近刊

『宇宙』は前に三宅先生が政教社から出版せられたる書である。現代第一の碩學三宅先生が一代の哲學に系統を立てられたるもので日本の學者にして自己の哲學を組織せるは先生を措いて外に無いその思想高遠深邃、從て其文字を讀んで其意義を知るに難く、初版千部再版千部三版千部を發行せる後、先生日本人にして此書を解するは三千も猶は多しとして斷然絶版せられたのである。青柳有美氏は博學宏識の人、今本社先生に乞うて、氏をして之を平易暢達、萬人に解し易きものとし、前に絶版に依りて知識慾を制せられし滿天下の人士に提供し得るを喜ぶものである。

▲實業之世界社
社長 野依秀一著
□ 無學の聲
▲四六版七六八頁
▲定價一圓廿錢
▲送料八錢

「日本及日本人」本書を評して曰く——實業之世界社長野依秀一と云へば、誰も知る名物男也。學歷もなく、富家橋門の後援もなく、腕一本腰一本四尺八寸の小軀を以て今日の名物男とされるは儘に彼が暇々者流に一頭地を抜くを知るに足る。殊に其元氣の旺盛眼中復た王侯無きに至りては、即ち當今青年の珍にして彼れの稱すべき所以也。「無學の聲」は即ち半生の大小雜篇を收録して之を一纏めとなしたるもの也。……面目躍然而して其の言ふ所亦た時病に當るもの鮮からず、必ずしも無學者の言を以て卻くべきに非ず、吾人は野依其人の珍を推奨すると共に亦た此の書の珍を推奨するに吝ならざる也。

▲三宅博士 幸田博士 其他序文
黒岩先生 大木伯爵
▲野依秀一著
□ 青年の敵
▲四六版七六八頁
▲定價一圓廿錢
▲送料八錢

今の青年程その敵に對して弱い者は無い、少しの誘惑少しの壓迫少しの困難にヘコませてしまふ。だから元氣が無くなる。世の中は不斷の戦である。敵に敗けてはもうソコに男子の面目は無いのだ、著者は克く内外の敵に打勝つて今日の地歩を占め得た青年快男兒である、滿天下の青年諸君は本書を一讀して其本領の何たるかを知り自己の信念に向つて猛進せよ、今は寸時もグズ／＼するの秋でない、奮へ！ 滿天下の青年諸君！

天下の四小快著

實業之世界社編輯局長 青柳有美著

▲快氣焰

▲四版發賣
△定價 廿錢
△郵稅 貳錢

▲短刀直入錄

▲三版發賣
△定價 廿五錢
△郵稅 貳錢

▲野式處世法

▲三版發賣
△定價 卅錢
△郵稅 四錢

▲傍若無人論

▲五版發賣
△定價 廿錢
△郵稅 貳錢

實業之世界社編輯局長
青柳有美著

□最新結婚學

▲最新刊
▲四六版金錄
▲定價 金五拾錢
▲送料 金六錢

結婚をした男女で結婚を後悔せぬ者の無いやうに結婚せぬ男女は皆な結婚せん事を望む者である。結婚を後悔する男女も亦結婚を欲する男女も皆共に結婚の何んであるかは知らぬ。これがまだ結婚せぬ男女が無暗矢先に結婚を欲し結婚した男女が何れも結婚を後悔する原因である。本書を讀んで結婚した男女は決して結婚したのを後悔するやうな羽目に陥る憂が無い。本書を一たび讀む男女は漫りに戀に苦み悩んだ結婚問題を如何にすべきかと煩悶する必要が無くなる。日本一の性慾哲學者であり又若い男女の人情に通ずる點に於ても又日本一である。青柳有美は本書を著述する爲めに性慾、人情、倫理、法律、科學に關する積年の蘊蓄を傾注し、歐米の學者の未だ試みざる新しい試みを本書によつて發表したのである。

實業之世界社編輯局長
青柳有美著

□不老不死

一近刊一

不老不死は萬人の望む處である。近世の醫學と科學との理想は人をして不老不死のものたらしめんとするにある。これは、空想の如くに見えて一歩々々や著々實現せられつつある。未だ不死の法は發見せらるゝに至らざるも、大隈伯の理想とする百廿五歳よりも更に廿歳長命して百四十五歳まで不老長壽の樂みを受けるのは決して六ヶ敷い事でも無くなつたのである。本書を讀みさへすれば人は百四十五歳までの不老長壽を保ち不死に近い身體のものになれるのである。又、小兒を産まれたまゝで殺してしまふやうな憂もなくなる。著者は最近の歐米學說に絶えず耳と目を傾けるのを怠らぬ萬學者で、本書に説く處に過ちの無いのは勿論である。不老不死、少なくとも百四十五歳まで長命せん事を望む者は是非本書を一讀すべきである。

實業之世界社編輯局長
青柳有美著

有美式

新刊
▲四六版美裝五百頁
▲定價 金九拾錢
▲送料 金八錢

青柳有美を色慾と女とのみ汲頭する者と思ふは未だ有美の眞面目を知らざるもの也。有美は人生のあらゆる慘苦を嘗め盡くし一道の光明を發見したる非常識の常識家なり。世に所謂常識を基礎とせる處世訓は決して處世訓に非ず。有美の如く社會上及び家庭上のあらゆる辛慘及び苦悶を経て到達せる非常識の常識にして初めて眞に人生の行路難に處する處世訓たるを得べき也。本書の説く處は實に此の非常識の常識を基とせる有美獨特の處世訓にして併も又本書の一半は最新の科學を基礎とし之に天才的即ち有美式の解明を施せる學術的研究の成果なり。是に於てか一たび本書を讀まば青柳有美の眞骨頭を解し得ると共に智徳兼備の修養を積むを得て人生の愉快と天地の不可思議とを覺るを得べし。

實業之世界社編輯局長
青柳有美著

無痛安産法

最新刊
▲四六版クローニス
▲定價 金五拾錢
▲送料 金六錢

産は女の大厄なりとは本邦に古來より行はれ人口に膾炙する處なるも、分娩に苦痛あるは最新に於て獨逸バーテン大學フライブルフ婦人科院長クレニツ博士により發明せられたる無痛安産法を應用せざる爲也。著者青柳有美は女子を目して牛獸類なりと稱道する一面に於て女子の愛護者を以て自ら任ずる慈悲あり、女子の分娩に憫む痛苦を見るに忍びずして茲に本書を編述してクレニツ博士發明の無痛安産法を詳説し、實験上より其方法を具に説き、之に要する藥劑も日本全土到處に産する事實を擧げ其調合法に至るまで記載し、猶ほ近世醫術の進歩が如何に驚くべきものにして、人を免疫性のものたるに至らしめたるかをも併せ説けり。分娩の苦痛を恐るゝ妻と妻が分娩の苦痛を見るに忍びずとする男子とは是非一讀あれ。

大好評

桃介式

十一版
▲定價 金五拾錢
▲送料 金六錢

桃介式とは何

曰く、何物をも恐れず、何物にも制肘せられず、眞に男らしき態度を指す也。
曰く、其行動突飛なるが如くにして突飛ならず、眞の人間の機微を穿てる處世法也。
曰く、獨立獨行以て巨萬の富を贏ち得たる秘訣也。
是れ故に本書を一度讀めば金儲、生活難、就職難、煩悶、立身出世の諸問題は立ちどころに解決せらる。

▲福澤桃介君著

無遠慮に申上候

六版
▲定價 金六拾錢
▲送料 金六錢

本書は『桃介式』の姉妹篇とも云ふべきもの、著者の經驗から見た世渡りの道を説いたもので國家の大事から市井の些事に至る日々の出來事を觀するが儘に叙述してある。『桃介式』を讀んだ人は必ず本書を讀むべき必要がある。何となれば兩者を併讀する事に依つて初めて著者の人生觀、社會觀等を完全に了知し得るからである。

■ 増補全部改版新版發賣 ■

▲ 故小柳津勝五郎翁著 ▲ 遺子小柳津小補氏増補

二倍收穫天理農法

定價金一圓二十錢 郵税金十二錢 大版上製本箱入り二百三十頁 口幅五枚入り

此本を能く読んで實行すれば、米でも粟でも大豆でも小豆でも大根でも芋でも野菜でも、さ
 小柳津勝五郎翁が、廿年間の苦心を経て、發明したもので、從來の農作法に大革新を來したもので
 である。高い金を出して人造肥料など一切買はなくても、此法にさへ依れば二倍の收穫があると云ふの
 だから、餘りに旨い話として信じない人があつても、併し實行者は悉く成功して居る。さ
 ればこそ、本書が現はれて既に二十六版を賣り盡したのも不思議ではない。然るに、一昨年小柳津翁
 が歿せられて以來益々天理農法が其効を認められて來て一層の研究を促進し、種々の新事實、新發見
 を見るに至つたから、是に翁の遺子小補先生が斯道の諸大家と協力し大増補を加へ、全部改版の上
 紙数を五十頁増加し本書を新刊發賣するに至つたのである。若し夫れ米價下落の爲め不景氣を歎す
 る農家諸賢、一年の計は新年にあり、本年は須く本書を讀んで之を實行し、數倍の秋收を計らんこと
 を切望するのである。若し本書に記載した方法に依り、所期の結果を得ない方あらば御申越次第特別の御教授を惜まぬ。

増收の寶典三卷の内

小柳津、池田兩翁、十文字氏序 ●實業之世界社編纂

(版七) 成功 失敗 **天理農法實驗談**

▲定價七十五錢 ▲郵税八錢

『二倍收穫天理農法』を實行して失敗した少數の人
 と、成功した多數の人との實驗談を蒐めたるもので
 ある。增收を望む人の必讀すべき好參考書也。

幸田^{博士}、大木^爵、杉浦重剛^{先生}序 ●實業之世界社編纂

(評好) **天理農法燠炭栽培**

▲定價金壹圓 ▲郵税金拾貳錢 ▲總クロス上製

本書は天理農法に熟達せる諸大家二十四名士が熱
 血を絞つて其實行の極意を説いたもの『二倍收穫天
 理農法』と共に是非一讀を要すべき指南車なり。

▲實業之世界記者
無花生編著

□ 三怪物の自白

▲定價五十錢
▲郵税六錢

題して三怪物の自白といふ。三怪物とは誰ぞ。曰く相場界未曾有の大策士。今天一坊の稱ある松谷元三郎。曰く東西の兩洋を股にかけて世界的活動をなす博覽會櫛引弓人。曰く日露戰役の株式界の成金の親玉と謳はれたる鈴木久五郎の三人である。即ち本書は此三怪物の偽らざる大膽なる自由である。兎に角善かれ悪かれ、彼等が大なる事を成し遂げた半面には、幾多の天才と幾多の膽力と、幾多の知識とが含まれてゐるから、波瀾曲折に富める彼等の自白は、恰も冒險的立身小説を讀むが如し。

▲後藤男爵序文
▲不屈先生編著

□ 名士の偉人觀

▲定價七十五錢
▲郵税金六錢

本書は大隈伯、板垣伯、林伯、石黒男、澁澤男、後藤男、加藤男、三宅博士、森村翁を初め現代數十名士が、自己の接近し、私淑したる西郷南洲、岩倉右大臣、勝海舟伯、伊藤公、福澤先生、後藤象二郎、陸奥宗光伯、井上毅子、森有禮子、品川彌二郎子、矢野二郎先生、江藤新平、兒玉大將、星亨、中上彦次郎外數十の偉人傑士より得たる感想や教訓や逸話を記したるものにして、頗る興味深く、一讀多大の教訓を得らるゝこと請合也。

▲大木伯爵序文
▲樋口麗陽君著

□ 破 青年訓

▲定價五十錢
▲送料 木錢

所謂先輩の青年訓は山の如くあれども、青年の先輩訓なるもの未だ之なきを慨して、今、大隈伯、後藤男、新渡戸博士、其他先輩數氏の青年訓を駁し、即ち青年の爲め萬丈の氣焔を吐く、世の青年諸君は須らく一讀せざる可らず、先輩も他山の石とするを要す。

最新刊

■前東京市助役
衆議院議員

田川大吉郎氏著

■定價金一圓廿錢

■郵送料金八錢

都の机より

本書發行の趣意

野依秀一曰く——「僕は田川氏の人物に多大の敬意を拂つてゐる。近き將來に於いて必ずや大いに爲すある人物であると信ずる。で、僕は氏の説は常に好んで讀んでゐる。氏の文章はその爲人の如く穩健摯實であり、その觀察は世の常の所謂論客とは全くその軌を異にしてゐる。宜なる哉、氏の言ふ所、議する所は高遠なると卑近なるとに拘らず、よく條理を盡して、一點の過誤がない。以つて善く青年の範とするに適當なるものである。彼の三井事件に關する氏の論議の如き、正に天下一品と稱すべきである。僕は此の論文を見て悉く氏に傾倒し、書を寄せてその文を請うた。それに對して氏は快く此の文章を與へられた。これを出版するは實に僕の面目である。敢て先輩諸氏、青年諸君の一讀を望む。」

▲實業之世界社編著
三浦 將軍 縱橫談
 ▲定價 廿五錢
 ▲郵税 六錢

是れ天一品
 の觀樹三浦將軍が天下何人も知らざる種々の問題に對する大膽不敵なる奇警の言論集也

▲實業の世界記者
 一寸法師編
破顔 一笑
 ▲定價 二廿錢
 ▲郵税 六錢

笑ひは人生の花である。而かも無意味に笑ふは餘り感心せぬ。本書を讀めば笑ひながらにして人物を知り機智頓智を學び得らるゝのである。

▲幸田博士 大木伯爵序文
 ▲陸軍大尉 江上新五郎君著
天閣 一窺
 ▲定價 八十錢
 ▲郵税 六錢

書奇大一
 本書は戰記に非ず、一種の哲學書である。其著作の動機に就ては著者の序文に委しく述べてあるが、實に恐るべき寒心すべきものがある。此の恐るべき寒心すべき動機とは果して何であらうか？ 乞ふ一本を求めて其真相を究められよ。

▲實業之世界記者
 不屈生編著
苦學 の實驗
 ▲定價 廿五錢
 ▲郵税 三錢

本書は現に都下の大學、高等學校、中學校等に苦學しつゝある幾多の學生中より拔ける優秀なるもの、實驗談に成るものにして、其言ふ所悉く實行せらるゝ事のみ。故に苦學を以て身を起し志を達せんとする青年は先づ本書を讀みて後決心する所なかるべからず。又世の所謂樂學生は本書を讀みて自重する所あれ。

當代八十名士の觀たる

■福原元君編 ■定價金卅五錢 ■郵送料金四錢■

學問及職業の選擇

如何なる學問を修むべきか、如何なる職業に就くべきか、これが青年諸君の前途に横はれる大問題である。諸君は果して去就に迷はずよく己が行くべき路を見出し得るか。煩悶懊惱なきか。昏迷感亂なきか。兎に角、吾人は此の親切にして周到なる助言、忠告、指導を諸君に與ふるの緊要なるを知る。

■士名諸筆執■

- ▲平田子爵 ▲秋元子爵 ▲鎌田慶應義塾々々長 ▲澤柳政太郎、添田壽一、井上辰九郎、井上哲次郎、加藤弘之の諸博士 ▲大隈伯爵 ▲江原貴族院議員 ▲澁澤男爵 ▲中野東京商業會議所會頭 ▲林慶應義塾大學教授 ▲棚橋一郎氏 ▲本野讀實新聞社長 ▲佐治實然氏 ▲青柳早稻田大學教授 ▲加藤咄堂氏 ……

青年の行くべ路